主な内容	
2面	総会・寄稿
3～4面	支部総会案内・寄稿
5面	寄稿
6面	支部総会・寄稿
7面	維持会費納入者一覧
8面	維持会費納入者一覧・決算書
9～10面	寄稿
11面	同窓生の活躍
12面	同窓生の活躍・支部総会
13面	在校生の活躍・お知らせ
14面	お知らせ

佐渡高校同窓会報

発行所　佐渡高等学校同窓会
代表　鈴木　啓介
題字　川上治美(昭47年卒)
〒952-1322 新潟県佐渡市石田567
新潟県立佐渡高等学校内
振替　00620-3-805
☎(0259)57-2155代
FAX(0259)52-5253

ご挨拶

同窓会長　鈴木　啓介

同窓会会員の皆様にはお変わりもなく益々ご健勝のことをお喜び申し上げます。

長く続いた新型コロナウイルスの流行もやっと峠を過ぎ、いろいろと制限のあった日常生活が徐々にコロナ前に戻りつつあります。同窓会活動におきましても、総会を始め多くの支部総会が中止となり、同窓会の皆様との交流もできず寂しい状態でしたが、やっと昨年夏に参加人数制限の上で二年ぶりに同窓会総会を開催することができました。また、関西支部総会や中部支部同窓会（北帰会）総会も開かれ、本年度はさらに多くの支部で活動が再開されると思われます。会員の皆様に直接お会いできることを楽しみにしております。

昨年度の同窓会活動に関しては同窓会役員、担当職員で定期的に会合を持ち、佐渡高等学校生の学校生活をサポートするために同窓会として何ができるかを話し合い、昨年度には次の2点を行いました。

まず、佐渡高校下の新潟交通鍛冶町中原のバス停には屋根がないため、雨や雪の日などには佐渡高校生をはじめとした多くの利用者が困っていることで、待合所建設の費用の一部を補助させていただきました。すでに完成しておりますので、停留所前を通行する際には見ていただければと思います。

もう一点は生徒用ロッカーの購入・寄贈です。現役、卒業生の保護者より現在のロッカー購入の仕組みを変えられないかとの要望が同窓会に複数寄せられました。現在の仕組みは入学時に生徒が個人的にロッカーを購入し、卒業時に持ち帰るというものでしたが、入学時に保護者に金銭的負担がかかること、卒業時に家に持ち帰るとしても不要となる事が多いこと、他校では学校に既にあるロッカーを使用しており負担がないこと、等からなんとかならないかという要望でした。話し合いの結果、同窓会として3年間をかけて毎年新1年生にロッカーを寄贈し、学校に据え置くこととしました。保護者の負担軽減に加え、このロッカーに「同窓会寄贈」のシールを貼ることで、現役の学生さんに同窓会の存在や活動を直接アピールし、卒業後の同窓会への参加につなげていきたいとの思いもあります。

このような同窓会の活動を広報するために、この会報や各支部への報告に加え、ホームページや公式LINEの作成に取り掛かっております。いまや情報取得の主なルートは、特に若い世代においてインターネットとなっています。SNSを通じてなるべく多くの卒業生に同窓会活動の周知を行い、興味を持っていただいて積極的に参加していただければと考えています。これらに加え、今年度は課題となっている年会費のコンビニ払いなどについても実現していきたいと考えています。

佐渡市の人口が令和5年3月31日現在で49947人ととうとう5万人を切りました。昭和40年の人口が10万人であったことを考えると、この半世紀で半減しています。昨年よりチャットGPTに代表される文章や画像を自動生成する対話型人工知能（AI）が急速に影響を広げており、今後の社会活動の仕組みを大きく変えるのではと言われています。この人工知能の進歩と急激な人口減は、佐渡での社会生活も大きな変化をもたらすことでしょう。このような状況で将来の佐渡を支えてくれる佐渡高校生にどのようなサポートを行えるのかをよく検討し、同窓会として学校生活をバックアップし、母校の発展に寄与したいと考えています。そのためには皆様のご協力、ご支援が必要となります。よろしくお願い申し上げます。また、ご意見ご要望があればいつでもご連絡ください。

最後になりますが佐渡高等学校の益々の発展と同窓会会員の皆様のご健勝、ご活躍を心からご祈念いたします。

令和5年3月卒業生　コロナ禍のため、修学旅行は島内観光「北沢浮遊選鉱場」にて

ご挨拶

学校長　森川　幸彦

私事で大変恐縮ですが、教職の道に進み、今年で三十八年目を迎えました。

私が教職の道を目指そうと思ったきっかけは大きく二つあります。一つは大学時代に見た映画「思えば遠くへ来たもんだ」で武田鉄矢演じる若き高校教師の一途な姿に憧れを抱いたことです。

もう一つは、大学四年生の秋のこと。佐渡高校での教育実習で、当時の中山守夫校長先生から私の授業をご覧いただき、「あなたはいい教師になる」という大変光栄なお言葉がけをいただいたことです。とても嬉しかったことを今でも鮮明に覚えています。

その年の新潟県教員採用選考検査は不合格でしたが、何としてでも教職の道に進むんだという強い気持ちは揺るぎませんでした。卒業後の就職先も全く決めていなかった一月のある日、私の恩師である佐渡高校の本間唯史先生から、長岡商業高校の非常勤講師のお話をいただき、四月からお世話になることを即決しました。それが私の教員人生の第一歩になりました。

「みなさんいいですか、最初は右から。右・左・右　ひのひかり♪…」今年五月十一日　ホテル吾妻で四年振りに開催した佐高教職員歓迎会。閉会前に参加者全員で円陣を組み校歌を斉唱した一場面です。そしてフィナーレを迎え、代表幹事がエールを切って閉幕。久しぶりに大勢集った大変楽しい会でありました。そして佐高教職員の意気と団結の強さに感動しました。何と心強い。

今、教員不足が全国的に問題となっており、佐渡島内においても同様です。そのため、近い将来、労働条件や勤務環境等の改善が加速されるとは思いますが、教員の魅力は昔も今も変わりません。教員が生徒に夢や希望を語り、その信頼関係の中で生徒が日々努力し自己実現を目指す。

教員冥利に尽きることは、枚挙にいとまがありませんが、卒業式に万感の思いで立ち会うことができるのもその一つです。

本当に素晴らしい職業であることをあらゆる場面で伝えていきたいと思っています。

五月二十八日　久しぶりに県総体の応援に行って参りました。種目は男子バレーボール。保護者等による大応援団に交じり思い切り応援できる喜びをひしひしと感じました。

準々決勝　対戦相手は第一シードの東京学館新潟高校。打倒東学、目指せインターハイを目標に厳しい練習を積んできた選手達。しかし健闘するも残念ながら相手の高さに屈し敗戦。佐高は「山椒は小粒でぴりりと辛い」チーム。粘り強く四強に入る力があり、その特長を生かした好プレーを随所に発揮しました。選手諸君の活躍を讃えたいと思います。

その他、バスケットボール部、バドミントン部、空手道部など、男女とも県の四強・八強の力があり、また、陸上競技部は北信越大会で入賞し全国出場を目指しています。県総体では出場した全ての競技でみんなよく頑張ってくれました。遠征や練習試合等が限られる離島という不利を克服し、挑戦する心意気は、やはり「伝統の力あり　佐高　猛く新たに競いて勝たん　獅子雄呼ぶや　疾風も音なし　いざとどろかせ　我等がこの歌」応援歌のとおり伝統の力であると感じます。

最後に、昨年度の生徒会誌「獅子ヶ城」巻頭言の一部を紹介させていただきます。

令和五年度(二〇二三年度)、本校は明治二十九年の創立から実に百二十七年を迎えます。本校には、

「自主自律」「求真窮理」
「協調責任」「誠実感謝」

これらの校訓を胸に社会に巣立った数万の同窓がいます。海の彼方に遠ざかる島を見ながら大志を抱き、そして汗と涙と血を流し、幾多の苦労を重ねながら社会の幅広い分野に羽ばたいて行かれた先輩です。

さて、次は君たちです。諸先輩に続け、そして超えろ。君たちは様々な可能性を秘めています。未来へのときめきを感じながら、今をしっかり生き、そして自分らしく洋々たる船出をしてほしい。佐高生への願いを込めて、巻頭言といたします。

同窓生の皆様には、益々お元気で活躍されることをご祈念申し上げますとともに、今後とも本校に対し変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年度 同窓会総会

令和4年度の同窓会総会が、8月21日(日) 10時よりRyokan浦島にて、同窓生65名の出席で開催されました。令和2年度・3年度は、新型コロナウィルスの感染拡大により総会が開催できなかったため、3年ぶりの総会となりました。

総会の冒頭、亡くなられた同窓のみなさまに黙祷を捧げた後、鈴木啓介会長、森川幸彦校長からご挨拶をいただきました。その後、鈴木会長の進行により、議事が進められました。令和3年度の事業報告と会計決算、令和4年度の事業計画案と予算案が審議され、提案通り可決されました。

続いて、報告事項として、役員・支部長の交代について説明が行われました。副会長の末武正義様、松井夫佐子様、後藤圭子様が退任され、新たに林隆行様、石見裕子様、引野紀子様が就任されるとの報告がありました。報告の後、新旧の副会長様からご挨拶をいただきました。また支部長では、渡辺武司様(金井吉井)、神蔵貞夫様(両津吉井)、斉藤泰義様(金泉)が退任され、新たに西田健司様(金井吉井)、甲斐元也様(両津吉井)、今井茂樹(金泉)が就任されるとの報告がありました。

次に、事務局から、佐渡高校最寄りのバス停(鍛冶町中原)の待合室建設のため補助金を出すこと、旧・受用寮(吹奏楽部部室)の解体が予定されていること、獅子ヶ城会館を軽音楽部部室としても使用することの3点について、報告を行いました。

また、会費納入状況について事務局から説明を行いました。令和4年5月末までの会費納入者は2924名で、前の1年間より約60名増加したこと、一方で20代・30代の納入者が少なく、こうした世代の会費納入者を増やしていくことが課題であるとの報告がありました。

令和4年度は、総会は実施できたものの、新型コロナウィルスの感染状況等を踏まえて、総会後の懇親会は実施しませんでした。しかし令和5年になり、社会的な活動に対する制限が次第に緩和されています。新年度は総会の参加者がさらに増えること、そして各支部の総会が再開されることを、同窓会事務局として願っております。

(令和4年度同窓会事務局　宮崎　隆一)

鈴木同窓会長

新副会長

総会風景

令和５年度
佐渡高等学校同窓会総会
とき　令和５年８月20日（日）
総　会　10：30～11：15
アトラクション　11：30～12：00
懇親・交歓会　12：00～14：00
ところ　Ryokan 浦島　☎(0259) 57-3751
会　費　4,000円

「佐渡島 天地人 サイエンスプロジェクト2022」の開催

東京理科大学名誉教授　本間　芳和(昭和47年卒)

「佐渡島　天・地・人サイエンスプロジェクト」は、2022年7月30日、31日の両日、アミューズメント佐渡(佐渡市中央文化会館)において開催されました。このイベントは、佐渡の子どもたちが本物のサイエンスに触れ、その感動・発見を体感する機会とすること、ふるさと佐渡島の自然・歴史・文化・伝統を考える内容とすることを目指し、有志による実行委員会形式で準備を進めてきたものです。

きっかけは、佐渡に縁のある、科学に携わる方々の出会いです。佐渡高校出身の世界的な生物学者である浅島誠先生(昭和38年卒、東京大学名誉教授、現帝京大学特任教授)と小生は2016年～2017年の2年間、東京理科大学総合研究院の院長・副院長という立場で一緒に仕事をする機会を得ました。さらに、2019年4月に公開された電波望遠鏡によるブラックホールの初の映像をご記憶の方も多いと思いますが、その撮影に関わった国際プロジェクトで日本の代表を務められた国立天文台の本間希樹先生は、ご尊父が佐渡中興出身で、その家系は小生の実家から1700年代中頃に分家したという間柄です。そんなご縁で2020年の七夕の日、浅島誠先生、本間希樹先生、それに小生及び東京理科大学の同僚が、東京で会食し、「佐渡の子どもたちに科学の面白さと知ることの喜び」を体験してもらえるようなイベントを行おうということで大いに盛り上がりました。

ただ、そのときは、私たち島外にいるものがどうやって佐渡でのイベントを実現すればよいのか、雲をつかむような話でした。そうした中で、インターネットで「佐渡人名録」という記事を見つけ、その主催者である佐渡市両津夷の渡辺和弘さんと連絡をとりました。渡辺さんから、佐渡市議会議員の室岡啓史さんや佐渡でゼミ活動を行っている日本大学の細田晴子先生をご紹介いただき、まさに芋ずる式に、あっという間に人のネットワークが広がりました。本当に素晴らしい速さでの展開でした。その秋には佐渡市及び佐渡教育委員会を巻き込み、2021年8月のアミューズメント佐渡のリニューアルオープンの記念事業として企画することがまとまりました。佐渡の多くの方々のご協力を得ることができたばかりではなく、日本大学や新潟国際情報大学、新潟大学など島外の皆様の協力により大きなイベントに発展させる目途が立ちました。しかし、新型コロナウイルス感染症が佐渡でも急拡大したため、開催の2週間前の8月5日に中止を余儀なくされました。

翌2022年の夏も新型コロナウイルス感染症の第7波の真っただ中に当たってしまいましたが、ワクチン等の対策も進んでいたことから、参加者への検温・連絡先の聴取、マスク着用・消毒の励行等により感染対策を徹底し、参加人数を制限しながら、ようやく第1回のイベントを7月末に開催することができました。初日は、4部構成の講演会・トークショーで、延べ300人の参加がありました。2日目は、5部構成の講演会・トークショーで、延べ280人、8種類の体験型ワークショップで、延べ200人の参加がありました。また、新潟日報社と連携し、「子どもフィールドサイエンスin佐渡」というイベントを共催し、新潟県島外の小中学生34名が2日目の体験型ワークショップ及びその夕方に講師陣と一緒に小佐渡のジオパーク見学ツアーに参加しました。

このイベントにより、参加いただいた子どもばかりでなく大人の方々にも、サイエンスの面白さ、好奇心を持つことの大切さなどを幾分なりとも感じて頂けたらと思いますが、2022年は、まさにその始まりです。2023年は同じ時期の7月29日から31日までの3日間の予定で、「佐渡島 天・地・人サイエンスプロジェクト」と「子どもフィールドサイエンスin佐渡」と一体化して開催します。これをこの先も持続できるイベントとして行きたいと思いますので、同窓生の皆様にもご支援をお願いいたします。

浅島誠先生のご講演

ワークショップ「野草でコーラ作り」

関東支部 第25回総会・懇親会のご案内

★**日　時**　**令和5年9月24日（日）**
受付開始　10時20分～
総　　会　11時～11時20分頃
記念講演　11時20分頃～12時頃まで
講　　師　**大塚伸夫さん（大正大学前学長・昭和51年卒）**
演　　題　**「地域創生と佐渡」**
懇 親 会　12時10分頃～14時30分まで
○アトラクション
・春駒　石橋博さん、他
・若波会の皆さんによる佐渡民踊

★**会　場**　**学士会館　210号室**
東京都千代田区神田錦町3－28
（神保町駅A9出口より徒歩2分）
03－3292－5936（代）

★**会　費**
一般会員　8、000円
卒業後4年以内の会員　5、000円
夫婦同伴会員（一人）　6、000円

★**お申し込み要領**
・関東地区在住の方…同窓会報に同封（添付）の返信はがきに切手を貼って投函して下さい。
締切は**9月12日（火）**です。
・その他の地区の方…佐高同窓会本部事務局または直接、関東支部事務局までご連絡下さい。

★**お願い**
・旧佐渡女子高校同窓会（紫苑会）の皆様のご出席をお待ちしております。

★**連絡先**　ご不明な点がございましたら左記まで。
・関東支部事務局
090－4171－7947　木村広幸
・本部事務局
0259－57－2155　石川万寿美（教諭）

多額の寄付金ありがとうございました

令和4年11月に、昭和31年卒業の駒形勝也様より、佐渡高校同窓会へ高額の寄付金をいただきました。駒形様は「母校のためになるのなら、同窓会活動に有効に使って欲しい」と1，000万円もの大金を佐渡高校同窓会に振り込んでくださいました。たいへんありがたく、心よりお礼申し上げます。同窓会役員で相談した結果、今まで入学の際に個人負担だった生徒用ロッカーを同窓会からの寄贈として3年間かけて購入することにしました。また、今後130周年記念事業も控えておりますのでそちらに向けても有効に活用していきたいと考えております。

生徒用ロッカーの購入と寄贈について

佐渡高校では令和4年度まで、生徒が在学中に使用するロッカーを、自分で用意する必要がありました。入学時に新規で購入するか、佐渡高校を卒業した兄姉から受け継いで使用するか、いずれかのやり方を取っていました。佐渡高校の同窓生や現役の保護者の方から、こうした形を変えていくことができないかという要望が、同窓会に寄せられていました。

同窓会事務局としても、教育活動に貢献できる、そして多くの生徒の「目に見える」同窓会活動を行いたいという思いがあり、その一つとしてロッカーの購入と寄贈を考えました。また昨秋、東京在住の同窓生の方から、高額の寄付が同窓会に寄せられました。教育活動や同窓会活動に有効に使ってほしいとのお気持ちに、心より感謝申し上げます。そして、今後の多くの生徒たちに還元できる使途として、ロッカーの購入と寄贈を決定しました。

同窓会では令和5年4月より、1学年分のロッカーを年次進行で購入し、寄贈していきます。令和7年度には、3学年分のロッカーがそろいます。ロッカーは、生徒の日々の学校生活を支える大切な備品です。この購入に道を開いてくださった関係のみなさまに、心より感謝申し上げます。生徒たちには、寄贈されたロッカーを大切に使うよう指導して参ります。ありがとうございました。

（令和4年度同窓会事務局　宮崎　隆一）

宮田亮平先生（昭和39年卒）芸術院会員を祝う会

佐渡高等学校同窓会顧問　中川　哲昌

令和5年6月4日、「佐渡を世界遺産にする会」総会及び記念講演会が、新穂トキのむら元気館で開催された。

花角英世新潟県知事、渡辺竜五佐渡市長を始め、多くのご来賓のご臨席を賜る中、一般参加者も含め、総勢180名の会となった。午後2時から総会、その後午後2時50分より、前文化庁長官宮田亮平先生の記念講演「佐渡金山への思い」があった。

講演は、動画の映像も含め、佐渡金山に係わるものであった。その一つに、佐渡で造られた小判を再現するものがあった。平成24年7月20日、宮田亮平先生がわざわざお越しになり佐渡高校の教室でその作業が行われた。その様子は新潟放送の伊勢みずほアナと共に収録されていた。実は私も同じ教室に居てその作業を見ていたのである。時は過ぎたが、その時の事が懐かしく思い出された。

また、伊勢みずほさんが、オランダの貨幣博物館で佐渡小判を確認するところも動画に映し出されていた。江戸時代、佐渡の金は世界から注目を集め、その多くは東インド会社を経由してヨーロッパに流れたと言う。その金を生み出す佐渡金山は世界の企業であった。その仕事のゆとりの中から芸能・文化も生まれて来た。現在でも多くの芸能、文化が佐渡に残されている。

佐渡は、素晴らしい所と宮田先生は、何度も口にした。このように言われると佐渡に住んでいる者にとっては力が与えられ、元気が出る。

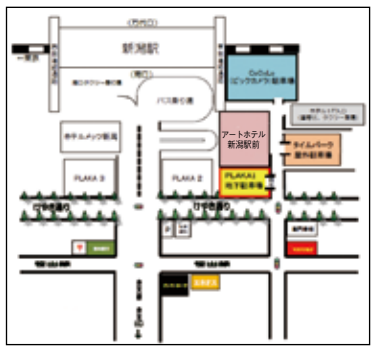
宮田亮平先生の日本芸術院会員を祝う会は、同日（6月4日）の午後6時から、旅館浦島にて開催された。花角知事・渡辺市長、森川幸彦学校長、鈴木啓介同窓会長始め、佐渡島内の各種団体、組織の長にご参集戴いた。

知事・市長の祝辞に続き、記念品の贈呈があり、宮田亮平先生のご挨拶と続く。次に鼓童の2名による笛と大太鼓の迫力ある演奏。その後乾杯、宴会と続く。総勢104名の大祝賀会となった。閉会の辞は8時20分となる。

新潟支部 令和5年度定期総会・講演会・懇親会のご案内

★**日　時**　**令和5年10月29日(日)**
受付開始　10時30分～
総　会　11時～11時50分
記念講演　11時50分～12時50分
講　師　東京大学名誉教授、文化功労者
浅島　誠　様（昭和38年卒）
演　題　佐渡から研究者の道へ
懇親会　13時～15時

★**会　場**　**アートホテル新潟駅前　4階「越後」**
新潟市中央区笹口1－1
電話　025－240－2111



★**会　費**
一般会員　**8，000円**
卒業10年以内の会員　**6，000円**
（総会・講演会のみ参加の場合は1，000円）

★**お申し込み方法**
・同窓会報に同封の返信はがき（新潟地区在住の方）、左のQRコードでお申し込みいただくか、新潟支部事務局または同窓会事務局まで電話かメールでご連絡ください。
締切り：9月13日(水)

★**お願い**
・紫苑会・北溟会の皆様のご出席をお待ちしています。
・新潟地区在住の方以外の参加も大歓迎です。
・若い世代の方々で同期会を開催していない卒業年の皆様には、ぜひ、出席して、同期の絆を深めてください。

★**連絡先**　ご不明な点がございましたら左記までご連絡ください。
・新潟支部事務局
080－1306－1393　槇本敏郎（事務局）
e-mail　sakoniigata@gmail.com
・佐渡高校同窓会事務局
0259－57－2155

佐渡の世阿弥 ―『金島書』を中心に―

山田　詩乃武（昭和52年卒）

＊本内容は令和五年五月三十一日、GINZA SIX　観世能楽堂における講話の一部抜粋です。

【世阿弥】

能の大成者、世阿弥は貞治二年（一三六三）生まれ嘉吉三年（一四四三）に死没、享年七十九、とされるが正確には判ってはいない。父は観世座初代大夫の観阿弥（観世清次）。妻は寿椿（法名）。子は長子元雅と次子元能、女子金春大夫氏信禅竹の妻。

なぜ「世阿弥」と称するのか。世阿弥の「阿弥」は時宗の開祖一遍上人が説いた阿弥陀仏を信仰する人々に授けた法名のひとつで、この時宗教団の芸能に優れた集団が同朋衆（どうぼうしゅう）で阿弥号を持った。

世阿弥は父観阿弥とともに室町幕府第三代将軍足利義満の庇護を受け、能の大成につくした。父の死後、観世座を継ぎ「夢幻能」を完成させた。ところが、義満の死後、六代将軍義教の代になると弾圧が加えられ、観世大夫の座を嫡男元雅に譲り、自身は出家した。元雅が伊勢の津で客死した後、義教により七十二歳で佐渡に配流された。

多数の謡曲を作り、「風姿花伝」「花鏡（かきょう）」「金島書」などを著した。

【佐渡の能】

鶯や　十戸の村の　能舞台
大町桂月

佐渡には三十棟余りの能舞台がある。かつては、二百棟余りの能舞台があり、日本の能舞台の三分の一が集中していた。今も、薪能が演じられ島民の生活の中に溶け込んでいて「市井の人々が舞い、謡い、観るもの」、これが佐渡の能の大きな特徴である。

江戸時代に入ると、元猿楽師でもあった初代佐渡奉行の大久保長安（ながやす）が文化政策の一環として能を奨励し島民の間に広まった。「京都は着だおれ、大阪は食いだおれ、佐渡は舞いだおれ」という言葉が佐渡にあるが、裕福な家の主が能にはまり、一流の能楽師を呼び寄せるなどして財産を傾ける様を指す。世阿弥に縁を持ち、江戸時代に広く発展を遂げた「能の島佐渡」。地域に根付いた能文化は、現在も大切に受け継がれている。

【佐渡での足跡】

世阿弥は佐渡配流が決まると、永享六年（一四三四）五月四日、京都を出立。翌五日に現在の福井県小浜に寄港し、下旬に佐渡多田港に到着。翌日、小佐渡山脈の小倉峠（笠取峠）を越えて長谷寺（ちょうこくじ）の観音に参詣。新保の万福寺に到着。数カ月滞在し泉の正法寺（しょうぼうじ）に移り住む。謫居生活の間に筆を走らせたのは詞章『金島書』と娘婿金春禅竹に宛てた手紙、いわゆる『佐渡帖』だけである。

【金島書】

『金島書（きんとうしょ）』は、「若州（じゃくしゅう）」「海路（かいろ）」「配所（はいしょ）」「時鳥（ほととぎす）」「泉（いずみ）」「十社（じっしゃ）」（内「薪神事（たきぎしんじ）」）の七章で構成されている小謡（こうたい）曲舞集（くせまいしゅう）。内容は、配流の悲しみ、恐怖、怒りなどの激情はほぼ見られず、平静な心情で綴られていて、老耄の身におけるある種の人生の諦観すら感じられる私小説風の詞章集である。

佐渡の演能の元祖は世阿弥だと言い伝えられているが、その証左として「十社」の章で「ここは、当国、十社の神まします、敬神のために、一曲を法楽す」と書いていることから間違いない。

「罪なくて、配所の月を見る事は、古人の望みなるものを、身にも心のあるらん」（配所）、「声もなつかし時鳥、唯啼けや、唯啼けや、老の身われにも故郷を泣くものを」（時鳥）。「罪なくて」「身にも心のあるらん」「唯啼けや」「われにも故郷を泣くものを」といった表現を使う世阿弥の心は揺れ動き、ここで唯一、配流の心境を吐露している。

そして、最終章「北山」では「山は自づから高く、海は自づから深し、語りつくす、山海雲月の心、あらおもしろや、佐渡の海、満目青山、なお自づから、その名を問へば佐渡といふ、金の島ぞ、妙（たえ）なる」と、佐渡を讃える。佐渡を「黄金（こがね）の島」と称したのは世阿弥が初である。

永享八年二月日の奥書があり、この年（一四三六）まで在島したことがわかるが、以後消息を断つ。一年十カ月の間は確実に佐渡に居たことはわかるが、その後のことを世阿弥は何も語ってくれていない。

【世阿弥残翳】

嘉吉元年（一四四一）、義教の死により赦免されたとすれば七十九歳、在島七年となるが帰洛したのか、それとも佐渡で客死したのか、いつ歿したかは今もって定かではない。

天文二十二年（一五五三）のころ、世阿弥の玄孫、観世宗家七代目観世元忠が一座を率いて河原田城主、本間貞直に招かれ来島し興行した。本間氏の居城獅子が城（現在の佐渡高校の地）から世阿弥の配所は比較的近いので、訪（とぶら）わずに帰京したとは考えにくい。中世の佐渡に最初に渡った一座が「観世」であったことも元忠の世阿弥への敬意が実際に形となったことをうかがわせる。

佐渡の世阿弥の心を流れていたのは運命への諦観であり、むしろ配流と遠島の謫居生活にある種の安らぎさえ覚えはしなかっただろうか。

余談だが、世阿弥が寵愛を受けた将軍義満の生母は紀良子（きのよしこ）。良子は順徳天皇が佐渡で儲けられた第六皇子善統親王（よしむねしんのう）（四辻宮（よつつじのみや））の曾孫。よって、義満は順徳天皇の玄孫となり母方に皇統の血が流れていることから皇位簒奪の野望すら抱いた。世阿弥は、このことを知っていたのか否かわからないが『金島書』「泉」の章で順徳院を偲んでいる。

罪なくも　流されたしや
佐渡の月
ドナルド・キーン

凩や　佐渡は流人の　ものがたり
長田幹彦

佐渡だから強い
～男子バレーボール部を取材して～

児童文学作家　高田由紀子（平成6年卒）

平成6年卒の高田（旧姓小林）由紀子と申します。

佐渡を舞台にした児童文学を初出版してから約7年。今年3月に10冊目の著書となる「金色の羽でとべ」を上梓いたしました。

佐渡の小学生男子バレーボールクラブを舞台に、少年たちが全国大会を夢見て奮闘する物語です。

きっかけは、2019年度の春高バレー（全日本高等学校選手権大会）に佐渡高校の男子バレー部が出場したことでした。

その快挙に胸が震えたのと同時に、どのようにして強いチームを作り上げたのかを知りたい、そして物語にしてみたいという気もちがわいてきました。

小学館の担当者に相談したところ、「小学校時代から描いてはどうか」と提案され、小学生を主人公にストーリーを考え始めました。

ですが、その後すぐコロナ禍になり、千葉に在住している私は佐渡に帰省することもままならない日々が続き、（もう取材は無理かもしれない）とくじけそうになりましたが、いったん原稿が完成した後もタイミングを探し続けました。

そして昨年の夏、ようやく男子バレー部の練習を見学して、監督の源氏先生にお話を伺うことができたのです。

部員のみなさんの練習の迫力やバレーの技術にも圧倒されましたが、一番印象に残ったのは、練習に参加していた中学生に優しく声をかけたりアドバイスをしたりしていることでした。

源氏先生にお話を伺うと「あの先輩のようになりたい。なるにはどうしたらいいか」という気もちが後輩たちを強くしていくのだそうです。

小学生は中学生、中学生は高校生のプレーに学び、高校生はプレーを見られ、教えることでさらに伸びていく。

そのつながりが佐渡ならではの強さの秘訣なのだと実感しました。

また、源氏先生が「ひたむきさとチームワークが佐渡高校の強み」だとおっしゃっていましたが、コロナ禍でも部員のみなさんの雰囲気がよく、イキイキとプレーしているのを拝見したことで、私も大きな刺激をいただきました。

取材後は一度完成させた後半の百枚ほどを一気に書き直し、小学生が佐渡高校の練習を見学することで夢を再確認するというシーンを盛りこみ、出版にこぎつけました。

いつか中学生編、高校生編も書きたいと夢見ています。

「佐渡だから強い」ということを教えていただいたバレー部のみなさん、源氏先生、ご尽力いただいた関係者のみなさま、本当にありがとうございました。佐渡高校のみなさんのますますのご活躍を心からお祈りしています。

高校時代にみんなで読んだ『こころ』

斎藤　明雄（昭和46年卒）

獅子ケ城の校舎で学んだ国語の教科書に夏目漱石の『こころ』があったかと思う。お忘れの方もおられると思うが、『こころ』は高校現代国語の定番であったことから、みんな一度はこの小説に触れたはずなのだ。もっとも、教科書に載っていたのは、三部構成となっている作品の「下先生と遺書」だったと記憶しているので、私たち高校生が教室で読んだ（読まされた）のは、これから死のうとする人の暗い話だった。痛快な『坊っちゃん』を書いた同じ作者によるものとは到底思えなかった。ちなみに「上　先生と私」はこう始まる。

私（わたくし）はその人を常に先生と呼んでいた。だから此所（ここ）でもただ先生と書くだけで本名は打ち明（ばな）けない。これは世間を憚かる遠慮というよりも、その方が私に取って自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。

作家の佐藤正午氏はこの書き出しを「日本語で書かれた史上最もポピュラーな小説の書き出し」で、文章は今も「若々しく」、「まるで昨日書かれて印刷されたようだ」と絶賛している（『小説の読み書き』岩波新書2006年）。

さて、その「先生」と呼ばれる人物は、東京での学生時代に、幼なじみの友人Kを裏切って死に追いやり、そのことを悩みながら生きてきたのであるが、罪の意識からとうとう自分も自殺する。その際、長文の遺書をつづり（こんなに長い遺書（原稿用紙約二百枚分）を書く人がいるだろうか、書いているうちに死なずにおこうと思わなかっただろうか……）、それを学生の「私」が受け取る、という設定である。

「先生」は（もちろんKも）新潟県人と明示されている。郷里は「本願寺の勢力の強い所」とあるだけで具体的な場所は示されていない。現在の上越市あたりであろうか。

一方、東京で学生生活を送る「私」の実家は「都会から懸け隔たった森や田の中」にあり、町には鉄道の駅もある。どこだろうと思い、記述内容と当時（大正3年頃）の鉄道網や時刻表などから絞り込んでみたことがあるがはっきりしなかった。ただ、改めて気づいたことが一つあった。それは昭和6年に清水トンネルが開通するまでは、鉄道で新潟から東京へ行くには、次のとおり信越線を経由しなければならなかったということである。

新潟（6：05発）→長岡→柏崎→直江津→高田→長野→上田→小諸→高崎→大宮→上野（21：50着）（大正3年4月訂補「列車時刻表」鐵道院運輸局）

約16時間を要する長旅だ。これを見ると、佐渡から上京するには小木港から直江津港に渡り、直江津駅から乗車するのが便利だったと思われる。おそらく若き日の「先生」やKもこの線を利用して上京したのであろう。新潟―上野間の直通は明治26年に開通している。

空よ　風よ

倉田　史子

しらしらと明け初める空
みどりの森がとおくひろがる
春になれば春の花が香り
夏がくれば夏の風がにおう
木漏れ日の下
しずかに流れるせせらぎのおと
名も知らぬ草の葉陰で
ほら　虫たちが羽音をたてている

今ここにいるわたしのなかを
あたたかな血がめぐるように
あの森の木々の一本一本にも
ひたひたと樹液が流れている

生まれたばかりのわたしに
はじめての息を与えてくれた風は
死んで行くわたしの
吐息もしずかに受けいれるだろう

あらゆるものがつながっている
命の織物のなかの
一本の糸でしかないわたしとも

第22回日本歌曲コンクール優秀賞受賞作品

昭和35年卒業。佐和田町河原田出身
日本詩人クラブ会員。日本現代詩人会会員。「東京四季」同人

受用寮(男子寮)OB会の集い

「今夜パン会をやるぞ」―。こんな懐かしい会話が飛び交いそうな楽しい集いが6月27日、河原田のRyokan　浦島で開催されました。

旧制中学時代の明治30年から昭和44年まで続いた佐渡高校男子寮「受用寮」のOB有志の集いです。この寮は、昭和39年の新潟大震災にも何とか耐え抜いた代物です。首都圏では、何度かOBが集まっていましたが、地元佐渡で多くのOBに呼びかけての開催は、事実上初めてのことでした。

この集いを開催しようとしたキッカケは、吹奏楽部の部室でした受用寮最後の建物の旧食堂が解体されることに決まったためです。残る寮の面影は、寮と校舎をつなぐ石段のみとなります。ちなみに、この石段は、北　一輝（旧制佐渡中学一期生）の弟で器械体操が得意だった北　昤吉先輩（戦前戦後活躍をした代議士）が逆立ちをして昇り降りしたと伝えられています。また、受用寮は全12室。6人部屋から12人部屋まで、約100名の寮生が生活していました。

さて、今回島内外約80名に案内を差し上げたところ、中川哲昌先輩を筆頭に18名が参加しました。事務局を担当した宮川安則先輩の司会ではじまり代表世話人の浜口鶴蔵先輩のあいさつ、計良武彦先輩の乾杯で進行、酒が進むに連れ、〝あの当時〟にフラッシュバック、懐かしい寮生時代を熱っぽく語り合いました。なかでも、舎監の話が最も盛り上がりました。ピヨ、オッチャン、ルート8、アオ、チンサイ、ゲッチン、等々…。次から次へと懐かしい先生方の名前が出てきました。

寮生でなかった佐高OBの方々が寮生活をイメージされるなら、夏目漱石の小説「坊ちゃん」を思い出してもらえば、と思います。昭和30年代の佐高「受用寮」も、舎監と生徒の関係は「坊ちゃん」の旧制松山中学校とほぼ変らないようなものだったと思います。

また、いささか尾籠な話ですが、男子寮では避けて通れない〝問題〟でも大いに盛り上がりました。インキンタムシの問題です。風呂で伝染したと言われていますが股間がメチャクチャ痒い。タムシチンキをつけると今度は飛び上がるほど痛い。セルロイドの下敷きで煽るが、終わるとまた痒くなる、実に困ったことを寮生全員が経験したことです。

寮生活の楽しみは、午後9時の点呼の後から始まります。パン会の時は、夕方、中原の「中川パン屋」や鍛治町の「橋本屋」で買ってきたパンや菓子を食べながら〝楽しい話〟が続きます。また、時には寮を脱出して鍛治町の〝都家〟へラーメンを食べに行く事も。舎監の先生も見て見ぬ振りをしてくれていたと思います。三つの店は、「受用寮生御用達」だったようです。なお、各部屋にはヤカンに入った水があり、のどが渇くと、コップなどはありませんから、口をつけないで水を上から流し込む飲み方をしなければなりません。これが入寮一年生の最初の試練でした。

そんな、こんなの寮生活を懐かしみ、深夜まで〝青春〟を楽しんだ「受用寮OBの集い」でした。

猪股　文彦（昭和41年卒）

受用寮見学

令和５年度　佐渡高等学校同窓会金沢支部総会
令和５年６月４日（日）　於　割烹一休

第44回北帰会総会

令和5年2月11日（土）第44回の北帰会を開催いたしました。

コロナ禍の中ではありましたが、母校同窓会本部より引野同窓会副会長、佐渡高校より森川学校長、関西支部から須藤支部長、古賀副支部長のご来賓をお迎えし、北帰会会員10名を加えた総勢14名で総会を開催致しました。

名古屋も余寒なお厳しき中、ご参加いただいたご来賓の皆様には本当に感謝申し上げます。

総会はご来賓の皆様を囲んで例年どおり母校の思い出や佐渡の話題、また、ご出席の皆様の近況報告に盛り上がり、時の経つのも忘れ楽しい一日となりました。

森川学校長から佐渡高等学校の在校生の現況、生徒の様子、教育の取組状況等ご報告いただきました。

中部支部支部長　斉藤　克義
事務局　渡邉　拓人

短　歌

摩尼　久晴（昭和28年卒）

・数年に一度の帰省バスの中なまり親しき「チャー」の佐渡ことば
・青竹を束ねてたてる〝どんど焼き〟わが家の竹を父とはこびき
・野生下に生息すといふ朱鷺四四二羽なり国仲の森
・朝八時ラジオ体操ぎくしゃくと老いの体をくねらせてする
・一系を生きて米寿をむかへたり摩尼家の男の歴史をつくる
・宮先生の『埋没の精神』雪の夜を反復しごとく読み耽るなり
・島に来る観光客のふえたりとコロナ禍ややにおさまりし佐渡
・老いにつつ外出少なくなりて見るものも少なくなりぬ人間失ひゆくも

維持会費納入者一覧表

【職員】 森川幸彦 本間恂一 片山達雄 荒川吾朗 大矢哲 斎藤榮 須田傳一郎 本間文子 熊倉正則 田中聡 坂下文麿 小野修三 荒木美紀子 岡観浄 宮崎隆一 小杉禁一 渡辺剛 丸山昭夫 石塚透 【昭13卒】 今泉田鶴子 【昭14卒】 津端ちさ 【昭15卒】 石塚八千代 【昭16卒】 土屋千代子 【昭17卒】 尾崎サチ 本間悦太郎 【昭18卒】 井上惣左衛門 中山壮平 金子房枝 【昭19卒】 本間哲夫 駒形愳 宇治陽子 野島ハルエ 歌川昭美 猪股チセ 渡邊アイ子 城野広 【昭20卒】 鶴見光司 鈴木フミエ 本間昭子 明山君子 赤沼テル子 前田千枝 粕谷昭 【昭21卒】 伊藤芳美 北見節子 松田寛子 杉山八重子 本間シヅエ 鈴木チエ 佐藤玲子 福士薫 片山はるみ 戸田セツ子 【昭22卒】 中川信子 中川久枝 中塚滋子 平沢睦子 風間愛子 吉原豊子 木下たへ子 鈴木浄晥

松山弘範 蔵田昭雄 土屋郁男 菊池徹 【昭23卒】 宇貝昭午 本間理智子 桃井アイ子 市橋ヤヨヒ 本間圭子 浅島マリ 三浦久子 村山妙子 花角ヒサ美 伊豆野セツ子 増見リツ 菊池ノブ 渡辺正之 風間昭朗 渡辺東市 川本陽子 山本サチヨ 本間安 【昭24卒】 中山洋子 中村時子 本間令子 松沢トシヱ 佐藤良信 瓜林照夫 野沢孝夫 田中和夫 井上良一 村川治男 雑賀羊一郎 飛田知佳 【昭25卒】 山田悦子 湯田サダ 金子三従子 羽入洋 中村正寛 本間正彦 金子俊二 【昭26卒】 市橋喜作 本間秋宣 岡崎敬子 石塚方子 川辺武司 佐々木弘 本間弘美 石川天瓦 野々田聡 町田育代 小田仁之輔 菊池徹平 金刺保英 山本和江 加藤洋 中堀宏 本間セツ子 妹尾茂子 計良八重子 菊地直之 金井比佐 中村義隆 三浦東也 土屋忠義 池田好子 中村キミ 武井淳治

中川淳一 稲葉二郎 飯田信雄 【昭27卒】 末武一平 和田亮二 石塚サワ 安藤勝 高橋和代 山本フミ 野田寿一 高野保男 平田美恵 矢崎菫子 服部美穂子 掃部利久 菊池義昭 本間亮一 中村久樹 織田正子 本間照 臼杵三喜雄 生田文雄 菊池慶喜 浦本洋子 渡辺英夫 土屋シズ 中村正義 濱辺三枝 羽藤峯子 中村賢三郎 伊藤藤一 本間実 阿部郁子 土屋敏行 末武康雄 【昭28卒】 渡辺永二 中島治郎 渡辺チエ子 田中越江 山本研 影山明子 稲葉孝 近藤勉 源田衛 横地敏明 小杉陽之介 渋谷和朗 山口久江 本間真佐子 後藤トシ 岡固亨 矢田有年 小林加悦 本間真徹 山本ヒサ 山田淳二 魔尼久晴 生田伸 臼木淑子 田村安子 斎藤節勲 逸見千里 鈴木敏子 関和子 林英子 本間照 菊池ホナミ 林照 本間進 伊藤タネ

後藤禮子 脇野久三郎 信田貞雄 片岡正義 曽我伝一 中川道一郎 末武芳一 斎藤敦一 桑野敦子 田中テル子 中村了生 相沢久代 松本美智子 石川タカ 後藤新八 本荘一治 【昭29卒】 大西千世 市橋君江 向島達 斎藤慶子 大畠和子 大場俊一 鈴木一暢 佐々木誠一 松木伸夫 風間ケイ子 静間和憲 石井キミ子 八木清枝 金子重之介 小池勢津子 平田弘子 羽入初代 齊藤勲 田中アキエ 斉藤巳三郎 尾畑俊一 磯野晋 本間スズ子 日野房枝 前畠愛 本間久嘉 関向綾子 斎藤夏子 川村昇 中川隆 渡邊咲子 安岡克巳 近藤美重子 松本龍人 中川弘子 井出敦子 星谷敦子 森谷幸男 仲町初世 豊原久夫 黒沢久妥 大沢エイ子 嶋倉一郎 天池範夫 江部冴子 【昭30卒】 林サヨ 高橋道子 久保出男 大橋敏江 藤原綾子 本間富美子 後藤真砂江 石塚敏子 鈴木久光

本間武男 鈴木美紗子 東谷トモエ 本間重利 福井仁 西山良太 渡辺千恵子 渡部敏英 大津實 加藤禎子 幅野擴 本間璉 塚本利三郎 飛田桂子 魔尼義晴 平片知恵子 森平敏夫 斉藤文雄 真藤達彦 相田萬代子 鈴木ミノル 今井茂雄 舟崎清一郎 本間正巳 本間晋 荒井春枝 仲村哲夫 吉田好昭 羽生丈子 本間直紀 金子美恵 本間繁富 矢田光子 矢田富雄 伊藤加奈子 藤井実 清水薫 才川熙 本間靖子 脇坂克男 林美知子 深沢サヨ子 木村英太郎 桃井幸定 小嶽巌 古藤齋 金刺雅道 本間祥 本間フミ子 本間正晴 金田昌八郎 小田壽 伊藤春光 児玉辰雄 西川文枝 【昭31卒】 柴田芳夫 梅田滋子 本間栄三郎 生田睦夫 山口洋美 須田清志 水落重弐 福田哲也 渡辺芳伸 半田彰 菊地豊 早野睦子 本間義完 中川洋祐 三浦寿 田中足穂

市橋日出子 渡部清 村井巌 近藤繁雄 山郷富司 永井清 稲葉哲栄 矢田政子 本間和明 山本ミチ子 永井俊作 安田吉延 大滝興哉 本間洋子 佐々木真一 市橋英徹 高島節子 斎藤昭英 古屋清 高津恭子 梶田計嘉 相田栄一郎 土屋三雄 城野政彦 安藤寿子 安田政子 和泉貞次 笠井清志 山城一雄 計良芳英 若林昭男 高橋荘二 金井恭子 新田映子 中川佐保子 谷川邦子 牧野節子 早瀬絢子 臼杵美笠 金子邦朗 松永ケイ 原田郁子 森本美恵子 土屋之男 若林達雄 藤村さな江 松本秀邦 市橋駿 中野シヤチ 中川政八 荒井道枝 乙川知昭 佐藤政子 間島和之 小出清治 長田奈々子 川島敏秀 仲川八洲雄 首藤茂 桜井湛 濱口剛 齋藤順子 駒形勝也 中野晴代 臼木悦山 村田晶子 鶴間俊博 和田輝秋 池田恭子 山口光夫 神藏正巳 【昭32卒】 石塚冨士郎 市山征紀 板倉登 市橋英子 仲川末雄

坂田正通 飯田茉莉子 中川哲昌 本間忠義 平井寿美 勝木田博人 溝田幸子 山本忠行 鈴木桂子 森幾 吉田敏雄 本間尚夫 松中英忠 東山隆彦 斎藤忠之 金子均 高橋隆子 名畑栄雄 風間秀夫 高津桂 羽生令吉 松川文雄 酒井文代 小木曽ななよ 山本八千代 溝田隆二郎 江口悦子 若野忠男 金子信雄 作間良夫 斉藤桂子 安藤卓也 寺尾和弥 西脇美春 本間精一 山本茂夫 元田利夫 河原泰子 建原徹資 渡辺雅治 霍間厚英 清水登 栄邦昭 祝喜久夫 北嶋良英 柴山秀樹 仲川正夫 小島明徳 村田勝 冨沢健三 伊藤恒昭 唐崎清一郎 柴田艶子 佐々木学 渡部修二 古谷野勲志 小林幸男 本間三治 松島仁子 荒木朝光 杉本孝也 中川隆二郎 児玉昇 斎藤哲久 高野孝 生田睦美 岩崎賢 【昭33卒】 逸見正平 安田伊佐雄 長谷川桂子 羽豆光治 山口謙一郎 本間博 伊里和高 菊池和亨 清水幸治

市橋鶴男 遠藤恂 藤木康夫 坂野俊夫 中井泉 甲斐睦子 高橋唱平 石塚ルリ子 石塚友一 長嶋睦雄 三巻節子 臼木亮一 加藤郁江 石塚功 柳信治 宮川美千子 葉梨栄治 大場和範 林孝則 金子斐子 川原勇 中川元宣 石川晴彦 笠木一孝 西村玲子 野口明夫 中川宏 高野宏二郎 並木幸子 青柳寧識 斎藤春江 若林明子 安藤瑞恵 大井秀行 平山トモ子 渡辺秀雄 磯山ヒサコ 尾形広信 相川キミ 松田道雄 龍崎美恵子 飯田ヨシ子 菊地敬司 仲川一秋 平下俊六 真藤紀元 熊谷隆平 小出仙洋子 本間満 余湖博 益田明子 益田富士雄 池田幸重 畠山諭 計良金吾 青島ヨシエ 生井美弥子 計良信幸 川島悠紀子 村田淑子 計良勉 桜井昌子 島名淑子 石塚信之 榎本道子 青木征子 作田淑子 斎藤晴実 北見昭治 清水利広 【昭34卒】 上杉光彌 本間博子 土屋眞人 山本澄 須田健一 本間勲

斎藤照雄 久村久実子 田中弘 堀部知子 高野八潮 横地玲子 秋本起代子 本間彰 田中秀子 田上睦夫 浜口ミズホ 松中芳子 野田健 本間猛 塚原征治 計良武彦 秋野節子 竹内佐紀子 若林求 高野栄子 石川芳彰 高野三郎 斎藤法子 金山教政 名畑宏司 梶浦弘明 金子汎 伊賀伸次 畠山孝雄 加藤広文 阿部由美子 尾潟恒雄 丹下正 鳥井啓二 野沢方子 山本功 中川雅晴 小林秀雄 小玉良彦 小玉志保子 渡邉正孝 鈴木新正 仲村照子 渡辺元子 梶田忠温 石川博 大平精一 河野千尋 宇治義明 石見牧子 池功 丸山久野 新保美春 津金倫子 川上龍雄 児玉静夫 中川アキ 臼木美智子 斎藤正雄 梶井昌博 仲川新三 木村明之 田中次英 小田健次郎 須田巌 羽二生ミヨ 桃井宏子 宮本二三子 土屋満春 石塚正 中川明子 富田宝元 石原照久 逸見真三 田端榮祉郎 本多敏昭 佐々木信一

【昭35卒】 渡辺武司 渡部セツ 大木戸恭一 山田誠 飯田修 田中正晴 飯野恵美子 福田陽子 岩崎輝夫 平沢悦子 本間勝一 山田勝利 水野ハルノ 佐々木充 本間憲司 池淵弘子 渡邉剛忠 本間邦夫 齊藤蓮 齊藤遙 星野一丸 白井武文 本間左京 渡邉道夫 松尾勲 市橋成生 本間純一 池田暢洋 梶田一夫 倉内壮吾 伊藤窯一 末武小弥太 本間美佐子 風間一子 石井芳太郎 桑原洋子 関川敏晴 丸山英夫 庄司謙 中山景夫 真木山稔美子 小原沢厚子 海老名嘉一 古原富子 山地一子 金子億夫 伊里信行 本間篤 玉木冷子 本間春美 計良洋一 杉本安江 高野亮司 本間啓子 遠藤忠男 金子養正 本間貞男 岩城昭人 小管洋子 藤原好美 木村研志 渡辺浩一 計良直毅 岡崎瑠美 長原幹 近藤三和子 横山誠子 兵庫晴美 清田恵 石塚多恵子 青柳純子 飯田寿美子 倉田史子 土屋登志 大下ケイ子 中川俊彦

斉藤雅子 本間暁雄 佐々木ミヨ子 土屋隆子 岡野恵子 大場弘志 羽生茂 【昭36卒】 間嶋浩二郎 影山光枝 小林八重子 中村正臣 本間邦彦 伊里千恵子 外山圭介 多田小波 相田勝馬 菊池祐次 斎藤佳子 本間幸次 窪田和子 山田稔 笹本正司 大地智美 本田巌 反町和子 富田和則 伊藤友子 相田博通 榎章郎 川上重乃 金子嘉通 竹本正子 舟橋弘 見代美恵 山岸正右 山崎信子 八田礼 関口清剛 本間ムツ子 野崎南雄 本間壮平 渡辺弥 本間國郎 臼杵克身 中川和子 平岡昭子 平岡信之 仲村幸雄 青柳禎一 小田俊幸 山下英俊 川上昭博 松井重夫 金田トシ子 伊藤正一 仲村征司 中川毅 加藤寛治 三井あき子 望月俊夫 矢田正枝 山本顕男 猪股俊雄 加藤操 小林尚子 秋山マチ 佐藤正代 山田浩 萩原昌一 谷地平八郎 小林八重子 上林アイ 海老名武英 渡部雅則 林昭代 金子美智子

鈴木弘 河原幹雄 関川秀雄 川上一也 菊地敏博 梅村祐子 川窪寿和 佐藤敏一 中川文十郎 藤木篤典 三亀秀夫 仲川文子 石井保範 碁石学 高野純子 中原由美子 大竹あや子 野崎邦勝 本間道夫 中村芳子 寺林美智子 高野千恵子 柴坂晴夫 渡辺ミチエ 宇治達実 持田輝久 野口英子 【昭37卒】 山崎健夫 戸田正之 井梅佳子 寺尾弥 花岡次代 植田和子 金子竹男 恩田俊民 土屋純一 中條弘子 竪野よし子 柘植陽子 金子サトミ 深山礼孝 関口千鶴 伊藤日出海 長部憲忠 田上京子 板倉健 北條睦夫 榎頼子 雑賀大介 上杉俊孝 山本正治 斉藤克義 榎田端夫 斉藤公男 金子敏治 植田日出夫 大坪美代子 本間正宣 本間瑛 松本佐代子 駒形芳三 本間裕 名畑三十六 鈴木美代子 鎌形満 渡辺征二郎 近藤キヨ子 山本勝 本間敬二 石井洋子 神蔵勝雄 佐々木孝一 本間千恵子 山中武久 石崎常臣 石橋嘉一郎

佐藤明子 高下純夫 金子誠子 小別富美子 近辻道子 佐々木マツエ 長野靖男 清田美徳 松井正明 高野濱子 山本勤 市橋宣徹 伊藤雅浩 小玉良邦 斎藤衛 板垣千恵子 高野宏二郎 若林昭夫 細川誠 金子怜三 渡辺佳照 川上正晴 中山寛文 古御堂スエノ 山崎好江 佐藤セツ 三浦和子 今濱明子 木透伸夫 中村龍人 河原和子 菊地勇 金子忠 宮沢瞭子 清水千丈 池田勇一 熊谷一枝 本間フミエ 村川四郎 菊池三男 沖野谷徹 久保勝二 渡邉タケノ 金子正勝 亀田省三郎 谷本満枝 百目鬼洋子 佐藤香奈子 金子孝明 加藤二三雄 加藤紀美子 後藤靖子 引野美那子 金子正義 本間一美 金子陽一郎 田中正則 【昭38卒】 本間マサエ 霍間敦 千葉祥子 畠山茂樹 高野泰三郎 屋敷幸子 笠井ヤヨイ 土田一男 浅島誠 遠藤征吾 岩見明夫 中元瑛子 伊藤嘉足 樺島史朗 高橋典子 岩本二三四 本間隆夫 若林光伸 原田謙一

高津道夫 岡田邦洋 逸見安正 金子正夫 佐藤雅子 知本修之輔 児玉美津子 工藤ミエ子 中村守 伊藤寿彦 本間絢子 渡辺丸子 河原三喜男 羽二生ヌヒ 石岡好美 斎藤イツエ 小田郁子 池田牧子 町田富雄 信田勲 伊藤邦弘 北見孝子 金澤野里子 近藤栄昭 渡辺建夫 冨増幸子 田中輝明 盛岡慶子 阿部智子 三浦敏彦 村川俊彦 石井勝成 渡辺朝子 板垣徹 本田町子 若林治尚 樋口俊美 安藤昇 須田弘 石塚慎次 藤原博 冨永儀和 西崎明伸 鷹野ヤエ 臼木正男 林七司 小管英二 余湖由美子 中川久男 林和子 池野武一郎 浦上ミチ子 寺尾六次 上野史朗 小林栄子 桑原武子 中条寿子 山本妙子 稲葉幸男 銅郁夫 本間功 戸田美紗恵 本田康征 佐藤順子 吾反田佐千子 上杉国武 岡崎信 中川均 遠藤克彦 多治美詔子 山本雅雄 倉田和子 川原永久 佐藤洋子 岩崎紘美 【昭39卒】 市橋英雄

津端聖美 大木戸研二 久米喜美恵 川上保衛 和田亨 穴沢淑美 吉田康夫 本多康雄 佐々木伸太郎 大平迪子 伊藤裕子 掃部義幸 小田静江 計良実 三国雅子 松井要司 吉澤里未 山口保 杉本孝弘 石塚重康 本間克彦 佐藤瑞枝 星野猛 関川敬義 天池忠義 渡辺幸代 臼杵年正 鬼頭三枝子 山田暉夫 熊木徳子 廣橋光治 武田マサ子 須藤健一 斎藤正 羽入正路 土屋道代 臼木敏文 林部歌子 本間明生 池田峰雄 仲川恭司 小川耐子 櫻井直也 渡辺宏子 渡辺ヨシ子 池克巳 増沢則子 高野正之 渡辺愛子 宮田亮平 後藤雅之 渡辺誠二 村川明子 山田光世 野尻秋彦 川島淳二 榎洋子 渡辺兵三郎 木村敏子 川上アキエ 山田規矩子 中川智子 大滝政彦 末武三男二 尾畑サカエ 中野芳子 辻章 鳥井四郎 酒井源次 榎田繁雄 長嶋建之 三木敬子 橋暢克 本間巌夫 土屋寿子 小野喜実子 渡辺孝行

梶井正之 正本陽子 永田敦子 本間淑人 斎藤勝美 【昭40卒】 塙ミエ子 齋藤芳雄 相田雅夫 伴蔵泰市 高杉廣子 北川淳子 斎藤利和 浅嶋義之 山崎弥代一 飯田洪平 田中里見 甲斐元也 土田孝子 佐々木克昭 松本陽子 和泉徹 渡辺敏夫 阿田原輝明 柳内美智子 小林斐佐 丸山由美子 弾正俊一 丸岡杏子 内堀順二 中川伸治 瓜林正博 八木洋 海老英子 高野洋二 中川絹代 吉原美枝子 粕谷賢市 谷川季男 土屋明子 影向範昭 青山芙美子 中川悦郎 竹田新太郎 石塚豊 角田芙佐子 野口民夫 大西薫 石橋博 石栗綾子 藤田チヅ子 石井美明 渋木玲子 本間瞭一 児玉俊次 池登志邦 高下章 中村幸雄 山田セイ子 中山ミナ子 尾潟正浩 荒木政子 熊倉美奈子 佐野裕子 坂上素子 高野嘉巳 佐々木孝枝 本間敏史 鹿野元子 金子恵美子 石崎真知子 小林一美 渡辺博之 石塚康昭 岩田秀夫 中川和夫 安達信子

長嶋敬吉 菊池昇 土屋節子 湯本イクヨ 廣満修 本間雅裕 土屋英子 藤井貴子 横山春美 斎藤泰義 鶴間美和子 荒井敏子 丸山ミサエ 秋田純一 中野美枝子 古屋野英夫 島田涼乃 櫻村トシエ 菊地純子 【昭41卒】 中川博 宮川安則 佐藤久雄 片桐勝子 山本三郎 本間澪子 八木マチ子 立壁邦子 近藤敏明 中沢昭 山内典子 本間一恵 吉田伸子 磯野利彦 柳みつえ 稲村三夫 鈴木秀子 篠原裕子 石川源博 西村進 辻二郎 村川勉 中川清 本間由紀子 猪股文彦 中川芳美 仁神康子 菊地正憲 堂地美恵子 小田雅道 川嶋雪江 中川良子 川上敏春 本間敏雄 伊里茂 都竹清子 長岡朱実 鈴木秋子 渡辺善幾 山本郁 三浦正明 柏倉淳一 山崎泰 滝沢優 山田秋男 丸山茂樹 古賀洋子 齋藤真智子 水野正子 石井永子 末武正義 大場憲栄 池田宏 中山秀英 吉田純一 小管秀顕 岸野久美

渋谷和子 江口近男 堀口喜江 鈴木富美夫 金子鯉子 杉山洋子 北嶋准 渡辺忠正 熊谷秀夫 榎本民雄 松井夫佐子 金森大蔵 秋元玲子 林純二 長野雅子 祝政子 佐藤弘子 中川登規彦 井上正夫 若林裕 山崎徳行 永瀬タカ子 松田友之 茨城牧人 有田雅春 菊地孝 名畑二三一 林恵子 佐藤優子 北見千香子 西埜覚 鈴木幸枝 渋谷正 河合真理子 服部旬美子 後藤清子 清田一 前澤由美 菊地省吾 本間道雄 白井昌隆 中村和子 堀正美 本間シヅ 児玉タエ子 永井久美子 池上裕子 石塚享二 佐々木和則 本田巨 浦野康子 引野マサエ 近藤利弘 山登秀夫 渡部稚子 池田俊晴 土屋久雄 日野尾利夫 山本泰夫 新井明 野澤喜作 大澤妙説 白井恵美子 中村明夫 小山喜代子 近江和芳 後藤章子 濱田毅 計良隆司 筑井三代子 才川弘美 斎藤良子 伊藤正一 佐野由則 関口之一 権代せい子 小路徹

青笹麗子 三木カツ子 間島孝子 江添岩雄 【昭42卒】 片山良博 錦織博子 児玉省二 佐藤洋一 樋口由美子 髙野一久 松島みえ子 武田さち江 仲川二三 渡部至 佐藤秀子 土屋千恵子 石井秀明 小山八百子 瓜林裕治 青木裕徹 髙橋元昭 光谷俊幸 逸見芳郎 池田一枝 平賀久江 河野清一 米津茂 久保昇 内木和代 川上治 石原敏孝 水上あつ子 木村和彦 渡辺正晶 登坂敏子 江村ミチエ 関根美恵子 荒木久夫 川嶋洋一 森まさ子 渡辺勇 後藤博美 有田ちず子 山田正子 谷地田雅将 奥村一幸 知念由美子 萩田由之 萩田章子 高津恵子 武部吉博 町野三築子 中返フジエ 中返信洋 小林滝子 逸見真由美 田中静子 隅田光夫 大野彰子 野田智子 大谷敏枝 大沢美千子 飯田三郎 後藤則行 鈴木信司 長岡芳子 中川良子 田尻正記 板垣恵子 曽我律子 中川たみ子 坂上登三雄 海老名茂 清水公子 伊藤潔 川原憲人

熊谷正美 知本正充 半田廣 本間里子 梶原道雄 山田イツ 近藤光信 菊地正晴 榎本祥子 河原勝 矢代春美 井所五市 林泰子 宮沢越美 佐々木壽之 川井廣吉 児玉良和 岩原幸子 山本澄子 小島富雄 富樫正一 西郷ゆみ子 中西明子 本田美恵子 榎有子 近田東一 大崎直樹 大沢弘子 外内幹寛 須田訓雄 諸橋恵子 金子和子 和田昇 新井ヒサエ 石塚由成 増田ひとみ 加藤恭子 【昭43卒】 片岡一英 笹山猛夫 伊丹ゆき 荒井文明 渡辺豊 須田均 高崎かづみ 永田治人 長嶋俊介 佐久間洋一 山下俊文 渡辺拓人 川辺文博 岩崎治光 吉田和清 土屋賢 中川恒男 金子亨 近藤昭夫 堀川雅道 海老名次夫 内堀徹 川嶋良夫 若林正吉 関屋幾代 境野妙子 髙野清三 古藤雅俊 長嶋良夫 飯田敏夫 三浦喜美子 岡部美知子 浜本和幸 藤澤正 久保雅博 矢吹洋子 本間衛 石場あやせ 石井悦子

加藤百合子 輪倉昇 仲川進 猪股泰正 斎藤英夫 笠井誠一 中原ハルミ 北野まや子 和田清一 小池正容 辻幹雄 清水俊英 岸川弓子 池真里子 菊池健一 渡部春樹 石塚三夫 上野秀子 安達礼子 森山ひろみ 後藤順子 本間明 小埜イツ子 西野光 大関早苗 小林はるみ 多田悦子 中田直子 土屋秀夫 石川利晶 河原久子 本間清二 横山すみ子 畠山直樹 相田武康 野本朝子 太田千世子 梶原清子 金子義夫 小田秀子 本間明 小澤口治樹 関川吉明 関川典子 土沼和子 髙橋直子 髙橋敏一 田原陽子 臼杵敏夫 仲田善夫 小田均 加藤静子 中川和徳 斎数吉昭 石田涼子 影山政広 崩賢司 本間吉一 渡辺サト子 高橋久美子 岡固謙司 須田義孝 野方俊郎 渡部育夫 【昭44卒】 野口雅史 金子雅一 藤沢一雄 山崎ちゑ子 天沢敬生 榎修 菅紀子 本間秀樹 伊藤達男 熊本とし美 川原啓子 渡辺作司

藤井真弓 加藤幸一 飯島好雄 須田明夫 小田直樹 猪股美代子 本間芳夫 石塚康廣 矢吹由紀子 細江道子 本間徹 村田慶朗 安部礼子 鴻江義明 川原正 本間敏市 久保田里子 吉田久人 高野秀樹 高野喜代子 大橋ひろみ 田中純子 伊藤繁 土屋英子 神蔵昇 西田裕司 木下義昭 野口道夫 計良秀実 杉沢良治 岩崎慶一 清田知見 長谷川輝夫 遠藤芳太郎 中川健蔵 渡邉博 本間宣子 本間千恵 渡部とみ子 北見敏明 田中啓子 織田勝 上杉紀夫 阿久津義三 本間清一 野崎喜一 中村かよこ 渡辺孝 若林重敬 沖内あい子 佐藤正明 横山美晴 渡部美和子 須藤千恵子 野口猛 土田まきえ 新堀るみ子 若林秀世 大地正廣 小林博武 諸星孝子 渡辺義一 飯沼博道 中森けい子 関口紀子 柴田茂 加藤貴一 斉藤久美子 関雅志

【昭45卒】 小田茂達 金子明 池好子 本田忍 田中倫子 金子のぶ子 渡辺美子

藍原重雄 石崎澄夫 加藤信之 渡辺啓子 浜田耕作 佐藤隆 門口栄 猪股悌一 弾正成子 土屋加代子 丹下清子 笹本芳広 笠井清通 山川辰也 高橋憲一 若林賢吾 池久雄 小池智子 齊藤孝夫 真後敏也 石井孝良 源氏ひろみ 計良茂樹 村田政久 飯島孝晴 古屋紀子 加藤文男 加藤麻智子 武笠純子 斉藤博通 金子博文 小川佐渡子 本間豊 磯西紀美恵 進藤千栄子 岡部静枝 松山巌明 本間貞夫 児玉功 斎藤文夫 岩崎正 川上るみ 金子哲夫 石川秀之 坂手裕子 斎藤芳子 本田昭栄 吉田秀樹 井所政利 島川公江 市橋英博 中村聡子 中川のり子 矢口逸子 池野義光

【昭46卒】 若林通子 杉山利子 高橋良子 岩野弘 篠沢英俊 大橋真理子 内藤稔 古川勲 西崎正好 石塚裕二 髙野誠一 山口喜二郎 佐野典子 伊豆野尚 斉藤寿子 碓井幸代 藤井茂 丸山秀彦 熊谷知巳 山本秀雄 平間俊雄

石見豊明 北見康雄 梶井裕子 本間三千代 永井裕美 光村克己 辻政之 源氏達也 渋谷久雄 須田秀昭 日野尾達夫 山本勉 岩見良二 金森宏三 高嶋定子 斎藤明雄 斎藤本恭 計良ミハル 渡部義雄 新畑章一 本間由美子 計良智子 金子英夫 関口圭一 宇留間浩 後藤敏数 田中芳晴 渡辺廣道 本間昭彦 松田文苗 矢島陽子 大崎留美子 高橋喜久雄 田所文代 本間初一 小山田恒子 池野正晴 菊地信弘 白川隆夫 森史朗 小出隆一 本間望 中川昭治 関根恵津子 本間正樹 草木重光 伊藤町子 渡邉日出子 坂下裕明 後藤圭子 石黒国雄 長原巳智夫 明楽幸栄 臼木孝久 細川朝子

【昭47卒】 川上治美 金子敬二 津田隆子 渡部俊秀 伴蔵アキエ 川崎新吾 深野由香里 臼杵克紀 木下照明 山下英子 佐々木辰弥 福井忠 伊藤政巳 西巻良子 松本茂男 横坂政広 渡部尚 佐々木秀道 倉内輝明 佐々木求 大谷営造

神谷千鶴子 近藤昇 坂井節子 江花米利子 八木千恵子 佐藤智子 斎藤重樹 坂上雅弘 岡固正幸 土屋邦明 梶田啓悟 原正秀 吉田耕二 石井浩平 宇治顕 三科武 渡辺和憲 牧野敏夫 武田かほる 茅野勝己 永井弘志 石川健次 山田冨巳夫 本間久美子 丸山員弘 加藤賢二 笹木俊明 山田悦子 磯野克也 金岡敏 荒木静 山本守 山本陽一 本間琢英 西花昭一郎 葉梨雪枝 児玉勝巳 長嶋文代 本間悌次 日野尾雅子 田中延和 尾仲博史 池野芳樹 石見裕子 本間芳和 笠井修 小管直樹 吉井千里 渡辺和英 若林広明 藤井ちえ 池田秀範 須崎桂子 本間順一 荻野由美子

【昭48卒】 和泉義資 山本秀昭 岡崎拓夫 岡崎一美 齋藤直己 金森賢治 計良正昭 逸見唯夫 小島秀樹 石川利之 中川明子 高野均 町田よし子 加藤健 石塚多加弘 佐々木啓夫 大沢達郎 中山道夫 本間則昭 加藤和美 片桐万理子

忠平彰 計良久美子 渡部春也 坂井栄一 石田久美子 井長博昭 宇留間和基 本江奈代 本間京子 森いずみ 鈴木和義 北洋一 藤田史郎 山本博章 神蔵俊一 右近淳一 笠井敦子 海北奈智子 斎藤寿紀 三沢恵子 計良範龍 村田恭子 高橋治之 本間孝之 森山紅子 若林栄次郎 駒形詩芸文 金子道郎 小川ひとみ 室井恭子 中川惣司 神蔵準一郎 渡邉一毅 中嶋洋一 佐山三憲 森田美恵子 浜本良一

【昭49卒】 山岸善晴 土屋正博 本田厚子 細川幸男 細川和子 小田浩 川端茂一 宮川幸子 高野悦子 菊池義晴 金子春人 西沢裕子 関口光男 長嶋健輔 児玉宏之 竹田裕 桃井正典 水上博雄 上濱洋子 石塚富二男 本間弘之 高橋多恵子 遠藤則子 金子郁子 長嶋待子 村田裕子 谷口明彦 堂前みどり 遠藤久昭 片山京子 土屋三千代 田平里美 臼杵勇人 田中邦明 本間琢治 山田民郎 中川里子 浅香昭二 鈴木雅彦

小川順子 島恵美子 木村和夫 渡部博 高津十三雄 高野充 木下邦春 川中明夫 斎藤勝 白川美智恵 白川弘二 清水ひとみ 若杉新子 若林純子 名取早苗 大間多恵子 西山学 柴野なほみ 中村満 齊藤俊宏 北村聖子 長嶋文代

【昭50卒】 本間優 浅川初志 斎藤哲二郎 中村亜佐子 桑原寛之 金田稔 菊池芳樹 青木百合子 伊藤文良 松井真澄 飯平喜文 山本篤 中村智子 本多哲朗 小出雄一郎 知本敏郎 北村議見 三浦基裕 石船孝夫 中野秀紀 小浜利雄 小浜庸子 本間俊一郎 渡辺尚人 吉田美都子 二敷正人 生田均 寺田紀子 渡辺靖 渡辺勉 金田隆志 石塚憲夫 伊藤広幸 宮城靖子 児玉光司 畑中将彦 中静満博 浅島裕雄 藤村亜紀 馬道哲 増田広子 本間泰子 中川康夫 中川幸子 岡崎大治 菊地誠 中川毅 計良雅之 木村秀子 佐藤ひとみ 三浦良廣 深野俊之 佐藤陽子

【昭51卒】 小田智子 天沢正規 風間成範 五十嵐清美 岡部薫子 藤木祐子 坂口法久 小林泰英 計良紀昭 塙佐敏 羽二生裕 佐々木史郎 金子英弥 小山逸郎 小杉久志 土屋浩 塩釜一公 加藤康子 熊谷寿雄 本間克久 木村広幸 河原森久 大塚伸夫 市橋敏裕 仲川邦夫 武井千秋 真藤桂次 藤田節子 高野智哉 渡部泰治 目黒康裕 土屋俊洋 古屋野あつ子 三浦元 猪股克彦 信田庸二 土居原潔 石塚一浩 坂上典子 近澤泉 菊池健

【昭52卒】 大谷直治 藤間みゆき 半田利達 相田勉 浜中力也 北見広史 佐藤透 引野健二 計良恵子 松原琢 渡邉正一 松村ユカリ 高橋昌也 信田寿雄 金子省吾 長谷川朋子 青木貴美子 遠藤治 北村議生 岩崎コズエ 本多正喜 山地安之 平田誠司 成田豊 椎野公則 菊地傑 山路善幸 本間公司 山岸芳恵 猪股慎二 山本秀樹 渡辺享子 齊藤寿子 亀山俊子

飯田徹平 田中るり子 松田雅子 吉田茂夫 大橋英喜 市橋佳代 広瀬葉子 広瀬俊三 計良伸二 中山久美子 本間正人 猪股雅一 北沢具子 重原令子 防村恵子 堀裕次 五十嵐真由美

【昭53卒】 山田裕子 林浩子 本間一秀 岡田裕子 佐野朋子 土屋義勝 大谷俊秀 福本めぐみ 笠木嘉則 高野庄嗣 金子博之 吉澤浩 清水裕美子 木透一寿 長谷川透子 荒井篤子 高橋尚子 高野彰 中川誠 関根敬子 小杉功雄 安藤正夫 隅田俊彦 芝賀寿子 影山光也 岡田和幸 遠藤知栄子 黒島幸代 渡辺倫子 本間長市 我山真興 住川敦子 矢島祐子 笠井博 金田淳一 佐藤和博 本間正人 杉坂芳文 名古屋瑞穂 齋藤明美 天野崇子 小池睦子 磯部恵美子 菅和枝 須田亮 齊藤由喜子 阿部恵子 井上久則 岩崎武司 関川聡子 高橋美由紀 小林尚子 土屋美代子 小杉満治 中川育子 川上司 畑中里美

【昭54卒】 荒川益美

内田喜之 藤森勝也 山本久 猪羽浩幸 熊谷隆一郎 白髭浩昭 秋山和明 今井勇雄 岩脇里絵子 須田康江 新発田靖 渡辺哲雄 中村信彦 清水幹明 野澤俊也 前田俊一 北見信浩 土屋吉晴 大花好美 細野久美子 近藤信子 渡辺由美子 栗原美枝子 山口明美 長谷川和久 田澤世津子 岩崎和広 大地求

【昭55卒】 本間亘 林純一 高野彰光 池田由佳利 中川美恵子 下野啓子 板倉隆 首藤雅子 金子広子 中川晴義 児玉悟 金子厚子 戸川真由美 羽根芳和 本間雅人 山本良博 岡野原光子 長谷山弘美 成田広 渡部聖子 本間雅浩 脇野哲郎 ドディンガー洋 津久井明美 池浩二 池良子 上杉育子 葛野イツ子

【昭56卒】 本間正洋 山田裕之 石原義久 日野八潮 山浦智子 村川元子 湯川玉恵 萩尾みゆき 山本陽子 小山康夫 川原晴夫 伊藤光 笠木和彦 大平範子 野口美紀 長田和義 駄栗毛真 石川揚子 岡崎康明

平野学 高野浩 中川早苗 田中耕一 安田住子 小田幸範 川端良徳 畑中耕生 渡辺美和子 本間聴 松田稔 富田龍彦 本間睦子 伊藤政人 本間和寿 永野ひろみ 近藤あゆみ 萩野徳之 村尾直人 野上けい子 宮川美恵子 山中津久美 島田由紀子

【昭57卒】 北見和子 河原紀子 本間勲 松本春江 韮塚敦子 後藤浩 安藤有希恵 川辺隆夫 嶋田正也 細木寅雄 高野徹 須藤めぐみ 遠藤由紀夫 余湖明彦 高寺利香子 今井厚子 隅田斜子 多並真起 津山照光 本間悟 高野由香里 長柴裕子 笠木聡志 高原佐恵子 羽豆拓夫 坂野信子

【昭58卒】 藍原清己 小林誠 熊崎恵美子 村川辰雄 勝藤文恵 掃部宏 斎藤芳和 山田朋広 尾崎正彦 山田弘子 野田英樹 本間恵美子 鈴木啓介 本間孝史 本間芳之 大瀬順子 塚本朋夫 山口正道 山崎浩志 松井秀樹 戸田幹人 間島恵子 渡部顕宏 古屋茂人 宇佐美友教 平野富士子

長島秀樹 濱本吉野 八代等 後藤康志 河村久美子 佐藤久美子 静間徹 中村文哉 持田学 加藤めぐみ 小島明美 佐藤寿樹 村尾智生 佐藤一人 土屋郁剛 土屋諭子 中川勝弘

【昭59卒】 渡部厚史 本間砂織 須藤文彦 内山均 林隆行 岡崎敬子 本間浩人 金子園華 平島留美子 寺島陽三 本間信行 山本勝司 本多洋子 石井貴子 渡部耕治 三浦章宏 脇野真司 上川芳浩 岡崎敏明 鶴間尚 輪倉由紀夫 外内浩一郎 本間浩 樋口直子 岡崎敬子

【昭60卒】 長茂一 原雅子 田長真 計良朋尚 山登靖 松井徹 安藤博通 高野雅巳 伊藤佐恵子 河治知子 小田成人 濱松智弘 中川悟 小原澤英彰 渡邊桂 儀同里美 内田喜徳 小間貴広 駄栗毛徳子 久住寿代 中野竜哉 計良盛章 川端弘一 藤井美智子 橋本敏郎

【昭61卒】 本間久恵 小宮山謙一 山田惣一郎 今井茂樹 菊地忠子 金子岳夫 児玉二郎

本間智子 中川学 野間内一幸 橋口勝代 伊藤弘勇 市橋裕美 林健司 金子秋彦 大井新一 石橋渡 高橋史明 浜本きく 飯田厚 本間正宏 小瀧望 岩崎亜圭美 岩崎徳之 春山佐知子

【昭62卒】 岩田美智子 津野友美子 池田宣史 本間聡 池田一彦 石塚間継 本間也寸志 土屋嘉広 鳥井俊伸 冨澤香津代 三浦吉明 木村喜一 野口秀夫 村山久美子 市野正廣 浅島隆 鹿野弘之 梶田和明

【昭63卒】 猪羽美奈子

木村明利 近藤美津子 野口幸雄 須藤美津子 野崎克裕 田中美紀 伊藤靖志 飯森清美 計良英章 田中英明 野崎奈緒子 水口正徳 谷地田健治 木下久美子 高橋美奈子 島上未来子 田中道雄 早川朋美 岩崎資 引野紀子 菊地直子 松本良平 梶田典子 本間智英

【平1卒】 中川孝嘉 本間賢祐 塙博樹 末武弘章 根岸慶久 木村陽子 小宮山澄 佐々木昭暢 田長美和子 野口文雄 筒井百合江 渡邊直樹 伊藤久代 遠藤芳輝

大桃一浩 高野永将 稲場直人 金子佐代子 戸田宏一郎 菊地美恵子 菊地雅代 鶴間智宏 中浜智子

【平2卒】 加藤芳宏 廣瀬芳恵 大友順 星野一博 保科安志 内藤哲也 松井浩司 黒部良一 本間隆行 児島信子 本間直樹 中川高志 引野香織 中川雅司 菊池さとみ 中堀良子 佐藤渉 五十嵐千代美 尾畑貴司 金子正博 本間悟 白井祐子

【平3卒】 堀口健児 大久保省三 清水泰美 中川到 大水正行 小野啓子

岩崎倫卓 北見あすか 金子直樹 金子康則 田中友二 川上大吾 本間哲彦 菊地祥子

【平4卒】 笠井貴弘 山田直行 石塚宣 飯田誠 後藤公彦 本間晴彦 鶴間京子

【平5卒】 山本忠 本多啓介 樋口めぐみ 安田一治 椿昌宏 土賀義幸 渡辺達也 上山香子 稲葉光昭 田屋美鈴 丹波哲也 金子真紀 後藤英

【平6卒】 塙丈昌 計良サユリ 星光代 山田元章 鈴木深紀 安藤武宏 桃井知治 山本実名子

金田雅貴 高田由紀子

【平7卒】 酒井紀和 植田鋼司 土屋純子 湖屋博久 岩原正樹 木村浩久 末武正洋

【平8卒】 石塚貴晴 北村香織 土屋悟 渡部守 伊藤栄傑 飯塚清恵 伊藤真吾 本田朋之 高橋敏直 大崎敬彦

【平9卒】 菊池直美 岡村陽介 山本弘道 松井正郎 日野尾利之 高橋雅人 金田紗耶香 大崎暁彦 齊藤俊輔

【平10卒】 鶴間利恵 小森健一 福山はるな 大嶋美菜子 須田武史 日野尾典子 植田芳恵

中森一良 中川森

【平11卒】 原田清樹 菊池直美 本間由美 山田祥貴 中川未咲 金子あゆみ 渡邉和代

【平12卒】 山川大輔 相良真有美 山中彰久 引野忠則 中川志詠 金子大輔

【平13卒】 岡崎道太 金子慶 川原健 加藤琢 計良典孝 髙野佳代子 伊東敬弘 中嶋貞治 松柴敬太 松柴みちる 計良和貴子

【平14卒】 計良知宗 椎井慎太郎 山田茉莉 大崎邦彦

【平15卒】 加藤一郎 渡部崇 本間弘樹 山本亮

斎藤萌 中嶋理美 兒玉大輔

【平16卒】 岡崎花野 加藤信 佐藤矩美子 斎藤雄弘 藤井宏行 関川弘行 金子幸世 渡邉智行 菊地諒

【平17卒】 首藤寿子 高橋咲江 大崎悠子 広瀬亮平

【平18卒】 遠見智香 田屋光将 富田匡信 金子実穂 石崎超矢 榎崇利

【平19卒】 加藤宏子 須藤千晶 齊藤大仁 髙野麻友子 三浦雄弘 伊藤真知子

【平20卒】 石井亜季 小田恵華 永渕真愛 佐藤智恵 関川且行 岩原由佳

【平21卒】 村川南帆 木透寿生 天澤麻紀 木村太郎 岩野力 金子大地

【平22卒】 風間伎穂 須藤良隆 川原友佳 菊池和人 石川拓実 齊藤美佳 近藤さやか 浅島雄弥

【平23卒】 中山なこ 関川知洋

【平24卒】 嶋田菜奈子 中山卓也 坂口栄樹 和田浩樹 山岸友実 清水悠平 齋藤恭俊 榎田栞 菊地優太 藤井忍 本間寛子 梶田真里 菊池創太

【平25卒】 風間裕太 川原麻佳 鈴木峻太郎 坂下貴規 杉坂夏海

早川桂 山中雄太 近藤啓太

【平26卒】 木下結貴乃 菊池誠人

【平27卒】 日野真木 村川楓 鈴木香里 川上志穂 藤井伸行 本間瑞希 梶田樹生

【平28卒】 谷川洋介 寺島朱音

【平29卒】 末武正範 首藤真衣 伊藤誠 伊藤斗士亜 佐々木駿

【平30卒】 竹田裕徳 鈴木碧 川上真穂 池野守裕 森日向子 津山夏維 早川侑

【平31卒】 渡部優希 佐藤萌子 木下洋一郎 本間美岬

【令和2年】 本間梓 三浦王暉

田長和真 瀬下夏澄 寺島琴乃 渡邊美波 野崎大夢 齋藤莉央奈 渡部聖生 菊池光翼 久保光

【令和3年】 本間陽希 桃井花楓 日野太木 土屋美晏フラガ 計良修司 齋藤亘孝 大久保遙澄 佐々木美月 祝志緒里 高橋樹 伊藤亜友斗 本間海花 末武美咲 近藤あかね

【令和4年】 川上聖子 仲野晶子 金森大海 猪股万莉 小島由姫 根岸勇翔

【令和４年度　県立佐渡高等学校同窓会決算書】

令和５年３月 31 日現在

（収入の部）　（単位：円）

項目		予算額 (a)	収入済額 (b)	未収入額 (b-a)	摘要
1 繰越金	前年度繰越金	2,493,475	2,493,475	0	
2 会費	入会金	912,000	902,000	△ 10,000	本校833,000円、分校 69,000円
	会費	4,725,000	5,421,449	696,449	2,735 人
3 書籍販売	百年史	6,000	0	△ 6,000	@3,000×0冊
	その他	10,000	5,000	△ 5,000	「同窓のおとずれ」1冊
4 寄付金	寄付金	10,000	10,011,000	10,001,000	
5 その他	預金利子	25	49	24	
	その他	3,300	0	△ 3,300	徽章販売収入なし
収入合計		8,159,800	18,832,973	10,673,173	

（支出の部）　（単位：円）

項目		予算額 (a)	執行済額 (b)	執行残 (a-b)	摘要
1 運営費	人件費	300,000	277,740	22,260	事務局職員賃金
	事務費	60,000	7,507	52,493	消耗品代 (ラベルシートほか)
	通信費	30,000	19,226	10,774	はがき、切手代等
2 会合費	会議費	50,000	53,890	△ 3,890	役員会旅費
	総会費	400,000	109,535	290,465	総会会場費、お茶・手土産代
	会合費	1,200,000	260,440	939,560	支部総会・同期会補助、役員出席旅費 関西支部、中部支部旅費
3 広報費	広報費	3,300,000	3,001,061	298,939	同窓会報
4 慶弔記念費	慶弔費	50,000	16,610	33,390	お悔み生花スタンド
	入会記念費	150,000	133,671	16,329	卒業証書ホルダー
	転退職員記念費	60,000	48,000	12,000	転退職員餞別
5 学校後援費	施設整備費	500,000	200,000	300,000	バス待合所建設費補助
	生徒活動費	500,000	401,994	98,006	全国・北信越大会補助
	講演会費	20,000	0	20,000	
6 舟崎文庫	舟崎文庫費	80,000	50,568	29,432	獅子ヶ城会館電気料
7 雑費	雑費	5,000	0	5,000	
8 積立金	特別会計積立金	1,000,000	12,000,000	△ 11,000,000	ロッカー積立（高額寄付）10,000,000 円 30 周年積立 2,000,000 円
9 予備費	予備費	454,800	3,410	451,390	寄贈絵画用額縁 3,410 円
支出合計		8,159,800	16,583,652	△ 8,423,852	
差引残高		18,832,973	−	16,583,652	= 2,249,321

六年間の獅子ヶ城

―戦中・戦後の記憶―（その1）

本間弘美（昭和26年卒）

10代のころ私は、中学・高校の6年間続けて獅子ヶ城の遅刻坂を昇り降りした。そう言っても今の若い皆さんは、すぐには信じないだろう。だがそれは嘘ではない。私が畑野小学校を卒業して、旧制佐渡中学校に入学した昭和20年の春は、太平洋戦争の末期。当時の教育制度は小学校の6年間（義務教育）中学校5年間の古い制度だった。敗戦後日本の教育制度はGHQ（米占領軍総司令部）によって大幅に改変され、現在のような小学校6年、中学校3年、高校3年の6・3制になった。GHQは戦前の日本の軍国主義教育を消去し、アメリカ流の民主主義と男女共学を柱にした6・3制を日本の学校に強制したのである。それが施工されたのが昭和23年4月。以後70年間日本の教育制度は、ほぼ変わらずに現在に至っている。昭和23年以前からあった旧制中学は、どれも新制高校に格上げされた。だから昭和23年に中学3年の課程を修了した者は全て旧制中学校を卒業し、そのまんま新制の高校1年生に変身を遂げたわけだ。この移行は全国的に歓迎されたようだ。従来の小学校6年間の義務教育が小中9年間に延長されたこと、また男女共学が導入されたことは、新しい民主主義の基本理念に支えられていたからである。

けれども当時の学校生活の実態は、民主化の夢とは正反対。今では信じられない異常なことが日常のように見聞されていた。それらの記憶を正しく残しておくことは大切なこと思う。そんな次第でこれから小生は、それらを可能な限り書き留めていきたい。ご笑読頂ければ幸いである。

1．戦争下の最後の入試

前述のように私は昭和20年3月に畑野小学校から、旧制佐渡中学校（以下『旧佐中』と略）を受験したのだが、筆記試験はなかった。あったのは①個人面接、②体育実技検査だけ。

①面接は受験生が一人ずつ三つの面接教室を廻り、2・3人の入試職員の質問に答える。氏名・住所・得意科目・好き嫌いなど。三つ目の教室では理科の試験管を使って基礎算数的な質問が出された。どれも簡単に答えられる質問だった。もちろん他に、面接中の姿勢態度や礼儀作法などもチェックされた。

②体育実技検査（よく覚えていないが）高さ2メートルの鉄棒に逆上がりで登らせる。跳び箱を跳び超える。木刀を構えたまま「ヤアーッ」と声を上げて突進し、10メートル先にある藁を巻きつけた柱に「エイッ」と叫んで切りつける。大声を出すほうが高得点を得られる、と言う噂があったので、私は思い切りデカい声を上げて突進した。その為か入試順位は4番で、入学後すぐ級長を任命されて苦労することになる。

2．戦局の悲劇的展開と将来への「夢」

受験生約三百人のうち入学したのは240人。新入生はみな緊張した表情に見えた。それは戦局の展開が最悪になっていた為でもある。

昭和20年2月には硫黄島が米軍に占領され、3月には東京大空襲。4月には米軍は沖縄本島に上陸（なんと旧佐中の入学式の日）。日本の敗北は決定的だった。『本土決戦、一億玉砕』など、軍部は国民に悲愴な覚悟を迫る動きを強めていた。私たち新中学生は国全体が敗亡に向かう大渦巻に巻きこまれながら、新しい生活を始めることになった。

将来への夢も希望もなかった。私の場合は中学校を卒業したら海軍兵学校を受験、そこを卒業したら航空隊に入り、特攻機で爆弾を抱えたまま敵の航空母艦に体当たりして死ぬ…。それが将来考えられる一筋の道だった。私だけではない。他の同期生たちも皆『国のために死ぬ』ことを覚悟していたと思われる。

旧佐中も学校として機能してはいなかった。当時旧制中学校は1年から5年まであったのだが、戦争の敗北とともに、全国の中学生が軍需工場に動員され、生産現場で作業をしていた。旧佐中の場合は、3年生は新潟鉄工所に、4・5年生は名古屋の軍需工場にそれぞれ全員が学徒動員で不在だった。だから私たちが入学しても、校舎内には2年生しかいなかったのだ。教職員も約半数が新潟・名古屋に移動していたから、学校としての教育機能は失われていた、と言ってもよいだろう。

3．授業始まる

そんな状況で一学期が始まっても満足に授業ができる日は少なかった。雨が降らなければ何かの作業、雨の日は自習か授業。確かな記憶はないが、週の半分は授業以外の作業に充てられたのではないか。

今はどこの中学・高校でも入学直後にはオリエンテーション（新入生への案内指導）がある。しかし私たちの時はなかった。だから戸惑うことが多かった。いきなり授業に入った教科もある。先生はみなコワい顔をして、各自の流儀でどんどん授業を進めていく。生徒がどんな境遇にあるか理解しているようには見えない。私は中学の先生は小学校に比べて冷たいなと思った。

戦争末期の物資不足は深刻で、紙も不足。教科書もノートも不足していた。私は数・国・理は書店で買えたが、英語と地歴は手に入らなかった。「教科書は上級生から譲ってもらえ」というのが学校の指示だったが、私には譲ってくれる上級生はいなかった。

4．集団登校 下校はバラバラ

毎朝の登校は地域ごとに集団で行われた。例えば真野の場合、佐中から6km以内であれば徒歩通学だったので、30名くらいの1年生が二列縦隊で進む。その後に2年生がやはり30人くらいで続く。先頭から後尾まで、70mくらいの長い行列になった。同じ真野でも6km以遠ならば自転車通学もできた。私は畑野だから自家にあったボロ自転車で通学できた。畑野から自転車で通学したのは1・2年生だけでも20人位。20台の自転車が一列に並んで、三宮沖の田圃の道を朝風を切って進んでいくのは壮観な一景だったろう。でも当時は舗装ではない。約8kmの行程は砂利道路で、自転車でも40分はかかった。

しかし自転車はまだ恵まれていた。畑野でも家に自転車がない生徒は毎日往復16kmを歩いて通ったのだ。当時は自転車はボロでも貴重品だったのである。

通学距離が10km以上になると、バス通学も認められた。相川や新穂や両津地区の生徒はバスに頼る場合が多かったらしい。更に遠い場合は下宿か寄宿舎。現在の佐高には寄宿舎はないが、昭和20年代には校地内に木造宿舎があり、100人位の「舎生」が寝食を共にしていた。海府、前浜、小木、羽茂出身者などが多かったようだ。また、河原田・鍛冶町などには下宿を専業にしている家もあって、当時は相応に繁盛していたらしい。

5．上級生には敬礼

当時佐中では、校外で上級生に出会った時は、立ち止まり敬礼する「きまり」があった。正式な学則だったかどうかはわからないが、たぶん軍隊の上官に対して敬礼する規則を学校生活に採り入れたのだろう。だから町の中で上級生が歩いて来ると、1年生は一瞬立ち止まり、右手人差し指を帽子のツバにつけて敬礼する。上級生が通り過ぎるまでは不動の姿勢を崩してはいけない。それが当時のあたり前の儀礼だった。もしそれをしなければ後で相応の罰を受けた。次はその一例。

Kという1年生が河原田のある家の2階の部屋に下宿をしていた。街路に面した部屋で、障子を開けると下の道がよく見える。あるときKが、障子を開けると、Nという2年生が通りかかり、自然に二人の眼が合った。Kはすぐ目を離し敬礼はしなかったが、間もなく誰か階段を上ってくる音がして、先ほどのNがツカツカ入ってきた。そして言う「貴様、さっき俺の顔を見て、何で敬礼せなんだか！」次の瞬間、Kは顔をピシャッと二発、力いっぱいひっぱたかれた。Nはそのまま黙って家を出て消えた。Kは唖然としてしばらくは何もできなかった。（これは後日Kから聞いた実話である。）

これに似た話はたくさんある。一種のイジメだろう。私自身は少なかったが、威圧感を受けたことは幾度もあった。畑野からの自転車通学の1年生は10人位だが、帰宅の途中、三宮集落の外れの芝地で、ときどき数人の2年生に停止を命じられた。彼らは、そこで1年生の私たちに「説教」するのだった。説教と言っても実際は、窮屈な学校の中でうまくスリ抜けていける方策を伝授する一種の悪知恵を伝えることが多かった。教員の渾名とか癖、校舎内で警戒すべき場所（銃器室など）や行為、2年生の中でも猛者（もさ）とされている人物名など、役に立つ情報もあったが、ほとんどはどうでもよいものだった。でもひとつだけ今も忘れずにいることがある。2年生の一人が言った。「いいかお前たち、上級生の言うことにはゼッタイ服従だぞ」軍隊では「上官の命令は天皇の命令と思え」とされていたが、それと同じではないか。その時以来、この言葉は私に大きな重石になった。

6.「玉砕」した沖縄の中学生

入学して瞬く間に70余日が過ぎた。その間1年生は山林作業、2年生は新穂ダムの建設工事に動員されて、教室での授業日は半分位しかなかったように思う。1年生の私は、晴れていれば鎌、鉈を持って登校し、校庭で点呼の後、真光寺集落の奥の山林まで歩いて登る。そこで伐採した薪材を背負って麓の薪置き場まで搬出。解散は午後3時頃になった。学校から作業現場まで往復12kmと聞いた。毎日それだけの距離を歩いた訳で、足腰が鍛えられたのはそのお陰かな、と今も考える。

入学後の70日間、学校で楽しかった思い出はない。反対に私は心理的に強い圧迫感を受け気持が晴れることはほとんどなかった。主な原因は日ごとに悪化する戦局だった。沖縄の日本軍は米軍に圧されて島の南端に追い詰められていた。海軍は残っている軍艦をかき集め出撃したが、戦艦大和は沈没し、まったく戦果を上げられない。鹿児島から出撃した特攻機も、米艦に体当たりする前に海中に墜落する有様で、効果はゼロに近かった。当時は厳しい報道管制の下にあり、毎日のニュースは正確には伝わらなかったが、「日本はこの戦争には到底勝てない」ことは、13歳の私にも分かっていた。

このような絶望的戦況の中で、6月23日沖縄の日本軍は「玉砕」(全滅)したのである。

数日後私は新聞で、沖縄一中をはじめ陸軍の補助部隊として戦っていた島内の他の学生たちも全員が「名誉の戦死」を遂げたことを知った。そして彼らには天皇の名で、「感状」が授与された。また看護部として軍に協力していた沖縄第一高女・同女子師範学校の生徒たちにも同様に感状が贈られた。

感状とは、簡単に言えば「お前たちはよくやった」とお褒めの言葉を並べた1枚の紙に過ぎないのである。このとき千四百以上の若い男女の生命が戦火に奪われた。その報いが一枚の紙片だったのである。

【後日この時の男子学生隊は『鉄血勤皇隊』、女子は『ひめゆり部隊』と呼ばれるようになり、映画などにも採り上げられている。】

7.「沖縄に続け!!」

沖縄玉砕の数日後、校庭での全校集会(1・2年生だけ)に、林准二校長が演壇に立ち訓示をした。校長は沖縄戦の概要経過を話し、島の中学生たちは陸軍と同じく全員が壮烈な戦死を遂げたことを強調し、一段と大きな声で叫んだ。「お前たちも沖縄の生徒に続け!」同時に右足で演壇をドンと大きく踏みつけた。級長の私は最前列、つまり校長の近くに立っていたから、その時のことはよく覚えている。私は朽ちかけた演壇が崩れるのではないかと思った。

この時の集会は、1・2年生だけだったが、400人以上がいただろう。みんな真剣に聴いていた。しかし校長が口にした「玉砕」という言葉は初めて聞く言葉ではなかった。すでに昭和18年からアッツ島・サイパン島・硫黄島などで、日本軍守備隊は全滅している。全滅(全員が戦死)では聞こえが悪いので、大本営は、玉砕という言葉を使っただけのこと。私たちは誰もが「国の為に最後まで戦って死ぬ」ことを決意していたわけで、校長の叱咤激励も新しい感動奮起を呼ぶものではなかった。演壇から下りた校長はハンカチで額や眼鏡を拭いていた。暑い日だったのである。

校庭から見下ろす河原田(かげはらだ)の町にはゆらゆらと陽炎(かげろう)が立ち、真野湾の果てには小木半島先端の神子島が蜃気楼で浮島になって見えた。その時は気付かなかったのだが、地獄の沖縄に比べれば佐渡はのどかな極楽だったのである。

実は、これが私の見た林校長の最後の姿だった。彼は戦争が終わると間もなく死去。死因は分からない。9月に本田寺で校葬が行われ、私も列席したが、詳しい事情は知らない。体調を崩していたのだろうか?

8.グライダー基地造成作業

7月に入ると旧佐中生は全員が真野の砂丘地に動員された。砂山を平らにして、グライダー訓練場を作る計画である。場所は陸上競技場がある所で、当時は広い松林だった。

グライダーと言えば静かにゆっくりと空に舞う飛行体で、戦争の殺伐とした雰囲気にはそぐわない。何かロマンを掻き立てるものがある。私はそれに引かれるように、毎朝4kmの道を自転車で走った。作業はスコップで崩した砂を木箱に入れ、それを生徒が背負って100m離れた低地に運ぶ。単純な労務の人海戦術だった。私は主にスコップで砂を箱に入れる役だったので、運び役より楽だったが、炎天下ではきつい仕事だった。次から次へと箱に砂を投入する休みなしの作業でへとへとになった。

ある日定刻に遅れて、両津から20人ほどの生徒が着いた。代表して2年生のSが作業指揮をしていた軍事教練の教官Kのところに来て言った。「両津からのバスが潟上の坂で故障して、今到着しました。」するとKが言った。「なぜ歩いて来んか?」私はたまたま近くにいたので、その時のことをよく覚えている。Sは返事に困って黙っていた。一分間くらい沈黙があり、教官が言った。「すぐ行って仕事をせい!」私はその時思った。教官は無茶を言うなあ。バスがエンコした潟上から作業地までは、歩けば2時間以上かかる。突然の事故で遅れたことをなぜ責めるのか、バス代だって高くつくのに。

その頃はバスの燃料は木炭で、登り坂でエンコすることがよく起きた。そんな時は乗客も降りてみんなで車を後押ししたものだった。「なぜ歩いて来んか?」と反問した教官も深くは追求しなかった。彼も結局はやむを得ない、と考えたのだろう。

9.男ならやって散れ!!

砂丘地の作業中に雨に降られた日もあった。小降りだったので作業は続行。トイレは隣の真野小学校の男子トイレを使うことができた。多分学校間で了解がついていたのだろう。私も1回だけそこのトイレを利用したことがある。木造校舎の中は授業中で、廊下を静かに歩いて行った。5年女子組の廊下の前で音楽の授業だったらしい。元気のよい歌声が廊下まで響いてきた。

男なら　男なら
未練残すな浮世のことは
花は散る散る　男は度胸
胸に日の丸抱いていけ
男ならやって散れ

私には初めて聞く歌だったが、簡単な節回しなので、2~3回聞くだけで覚えてしまった。元気いっぱいの少女たちの歌声が、校舎全体に響いていたのを今もはっきり記憶している。小雨の作業場に戻っても、なぜかこの歌は私の記憶の中で反復していた。はじめは何の歌かわからなかったが、やがてこれは特攻隊員を送り出す歌ではないかと気が付いた。でもその時はそれほどオカシイ歌だと感じなかった。むしろ、自分もいつかは胸に日の丸を巻き付けて敵艦に体当たりする。それを励ましてくれる歌だ。そのくらいにしか考えなかったのである。けれども同時に、特攻出撃するのは男だけだ。女は特攻になれないのに死んでいく男を励ますだけで何になる?そんなひがみに似た反発心も少し働いていたと思う。後年私はこの時のことを何度も思い出した。その度にこんな特攻賛歌が女子の音楽教材に選ばれていたことを、不思議に思ったものだった。

10.少年航空兵養成部隊

雨が上がると、平担に整地された砂地に、私たちとは別の少年たちが集まり訓練を始めていた。彼らは別の目的で、集められた少人数グループで、グライダーをロープで引っ張る訓練に励んでいた。実は最近になって初めて知ったのだが、この時この隊員の中に私の小学校6年時の同級生Tがいた。彼がなぜ選ばれたのかは分からない。しかし彼はこの時、爆弾を積んで敵陣に自爆攻撃をするグライダーの操縦訓練をしていたのだ。彼は上官からその目的を教えられていたそうである。

昭和20年7月頃は、日本はもはや敗北寸前で、政府は本土決戦に備えて「一億総特攻」を唱え、「国民義勇隊」を全国各町村で組織し始めていた。佐渡で始められたグライダー操縦要員訓練も、その計画の一部だったのだろう。

戦火は佐渡にも迫る

7月も過ぎ8月に入る。それまで新潟上空にはあまり姿を見せなかった米軍機も、しばしば現れるようになった。長岡が爆撃を受け大半が焼土になり、佐渡汽船おけさ丸も米艦載機の機銃掃射をうけ、数人の犠牲者を出した。新潟港内では、米軍機が落とした機雷に渡し船が触れて爆発。学徒動員で新潟鉄工所で働いていた相川中学生二人が爆死。佐渡の上空を米軍機が通過することもあったらしい。こうして戦火は佐渡にまでヒタヒタと近づいてきたのである。

8月と言えば普通なら学校は夏休み。しかしその年は本土決戦も間近に迫る空気で、日本全体が極度の緊張状態に包まれていた。休暇どころではなかったのだろう。6日広島に「新型爆弾」が投下され、長崎も同様に深刻な被害を受ける。9日ソ連が対日戦争を一方的布告し、サハリンや満州に侵略開始。日本は絶望の淵に立たされたそのころになって、学校は夏休みになった。困難の最中になぜ休暇になるのか、学校からのキチンとした説明はあったのか? その辺のことは全く記憶がない。それでも休暇はうれしかった。自転車で河原田の親戚の家に行き、砂浜で思い切り海水浴を楽しんだ。

そしてやがて、8月15日を迎えたのである。

ここまで書いてひと休みしたくなった。すでに予想を超える量になっている。今までは序章。本章はさらに時間と紙量を要するだろう。そこで序章は「その1」、それより後のことは「その2」として、来年の会報に廻したいと思う。だが小生も91歳。鬼界から呼び出しがあればそれまでだが…。自分では100歳まで生きるつもりでもどうなるか。

Que sera sera(ケ セラ セラ)(スペイン語「なるようにしかならない」の意の諺)けれどもこれはだいじな終活。がんばります。

同窓生の活躍

叙勲綬章にあたって

小田 隆晴（昭和41年卒）

梅雨に入り萌黄色の木々の緑はわれわれに沢山の喜びと幸せを運んでくれています。

佐渡高校の同窓生の皆様には長らくご無沙汰しております。私は団塊の世代で、47年ぶりに佐渡に戻り、現在老人保健施設「親里」に勤務しております。

畑野で生まれ、佐高時代は柔道部に入り、隅田敏明先生のご薫陶を受け鍛えられましたが、受験のため高校3年時に退部しました。当時の佐高柔道部は県内でも屈指の強豪校であり、同級生の長登君と服部君はとてつもなく強かったことを記憶しております。当時は「父親の勧める農業を継承するか、柔道を続けるか否かなどなど」悩み多き青春時代でしたが、考え抜いた末、新潟大学医学部に入学し、大学で柔道を再開し、6年間心身を鍛えました。小柄ですが、新潟大学全学柔道部の主将も経験しました、そのお蔭か今まで大病一つしておりません。

卒業後、新潟の病院で研修し、恩師の山形大学医学部教授の就任に伴い山形に移動し、平成18年に山形県立中央病院の院長を拝命しました。それからは、多くの周りの皆様に全ての面で支えていただき、県の基幹病院としての機能をより堅固なものとすることができました。この時の業績が評価されたのか、令和五年春の叙勲に際し、はからずも瑞宝小綬章受章の栄に浴しました。去る五月十二日、勲記と勲章の伝達を受け、引き続き皇居において、天皇陛下に拝謁の栄誉と共にお言葉まで賜りました。

私たちは、ここ3年間という長い間、新型コロナウイルスで苦しめられました。行動が制限され、逢いたい人にも逢えず、マスクで笑い顔も遮断され、大声を出して笑うことも制限されました。その後遺症として「人と逢うのがツライ」という心の悩みを持つ人が増えていると言われています。笑顔はただで多くの人を癒し、光明と太陽を与えます。そして笑うとNK細胞（免疫細胞）が活性化し、がんやアレルギーに対する免疫力が向上し、大笑いすることで腹筋を強め便秘にも有効であります。さらに最近はストレスホルモンを減少させ、生活習慣病にも有効であるという報告もされています。

人と人との距離をつなぐ橋には、三つの声と三つの愛が必要です。三つの声は笑い声、話し声と歌声、三つの愛は愛し愛、話し愛といたわり愛であります。これからは世界のあちこちで三つの声と三つの愛が満ち溢れることを祈っております。

蒼穹の下の蕾

舟木 莉音（令和5年卒）

令和5年3月卒業の舟木莉音と申します。現在は大阪大学文学部の1回生です。

私はアートマネージャーとして佐渡で演劇をはじめとする文化芸術の価値を普及させ、全ての人が心豊かに生きられる社会の創造に貢献することを志し、はるばる大阪へ進学しました。大学の授業では人文学の多様な分野や語学に加えて法学や共生学などの他学部の学問にも触れ、好奇心の赴くままに見識を広げています。2年次からは演劇学を専攻する予定です。また、課外活動ではミュージカルサークルと混声合唱サークルに所属し、大好きな舞台や歌に挑戦しながら、芸術家の気持ちに寄り添えるアートマネージャーになるためにも作品創りに携わる経験を積んでいます。6月には大阪府合唱祭に参加し、7月にはミュージカル「メリー・ポピンズ」で初舞台を踏みました。今、ここにいるからこそできる貴重な経験をさせていただき、尊敬する素敵な仲間とともに大好きなことに浸っていられる、夢のような日々です。

生まれ育った佐渡を離れ、大阪という新たな地に飛び込んで初めに実感したのは、「こんなにも世界は広いのか」ということでした。知らなかった場所、触れることのなかった文化、国籍も価値観も多様な、一生をかけても出会いきれないほど多くの人々。この世界にはまだ見たことのないものが沢山あるということに気づかされ、毎日が刺激に溢れています。同時に、銀河の遥か彼方にでもあるかのような、自分には縁のない土地とさえ思っていた大阪も、全く別の世界というわけではなかったということも肌で感じています。当たり前のように思われることですが、大阪は同じ日本国内に確かに存在していて、佐渡からでも現実的な交通手段を用いて訪れることができ、そこには人々の生活があるのです。頭では理解できても、この認識を感覚的に会得することは自らの目で見る体験によってのみ可能になると私は思います。新潟を離れることを決意するまでには様々な葛藤や苦悩がありましたが、今は大阪に来て視野を広げることができて良かったと思っています。

しかし、新しい環境へ羽ばたくことができているのは、佐渡島という故郷があり、家族がいて、佐渡高校で過ごした3年間があるからに他なりません。学びと挑戦に満ちた大学生活は楽しいものですが、知らず知らずのうちに心が張りつめた状態が続くことも事実です。そのような日々の中で、佐渡高校で出会った親友と定期的に連絡を取り合い、顔を合わせることはできずとも馴染み深い声を聞いて他愛ない話をするだけで心が安らぎ、活力を得ることができます。私にとって佐渡高校での出会いは、どれだけ時が経ち、世界が広がっても尚かけがえのないものなのです。

改めて、佐渡高校に通って良かったと心から感じます。

私の通う大学には「地域に生き世界に伸びる」というモットーがあります。この言葉のように、広い世界に目を向けながら、足元は逞しく佐渡に根を張っていたいと思っています。

その思いは、このコーナーの名称「蒼穹の下の蕾」にも通ずるものがあります。若い世代の同窓生が寄稿する新企画のタイトルを命名させていただくにあたって頭に浮かんできたのは、それぞれの場所で花を咲かせようとする若い同窓生たちの姿と、その上に広がる青空でした。離れていても佐渡高校同窓会の繋がりが絶えることはなく、先輩方も含め皆同じ空の下にいる。それだけで、自分は独りではないと思えて、安心して挑戦を続けられるような気がするのです。

第1回の執筆を務めさせていただいた者として、この企画がタイトルと共に皆様に愛されるものとなることを願っています。今後も若者たちの奮闘を温かく見守っていただけますと幸いです。

医療功労賞を受賞して

岩間 嘉代子（昭和48年卒）

この度、読売新聞社主催の令和4年度第51回関東信越地方医療功労賞を受賞いたしました。医療功労賞とは、山間部や離島、へき地など厳しい環境のもとで長年、地域に密着した活動を15年以上継続し、功績があり且つ現在も現役で働いている医療従事者に与えられる賞です。1972年に始まって以来これまでに4,700人を超える医療従事者を顕彰してきた歴史と名誉ある表彰事業です。

今回、関東信越地方賞8名（全国で35名）に選ばれ大変光栄に思っています。

思えば、50年前高三の時、担任が物理の先生で、放射線の道に進みたいと相談したら、日本は被爆国ですからまだまだ認識が浅く、「女性がそのような道に進まなくても、教育学部に行って教師になったら…。」といわれたことを今でも思い出されます。医療系に進みたいという希望があり調べていくうちに、当時からアメリカでは、放射線技師は女性の職場でしたので進路を決めました。

大学卒業後10年間は、関東圏で病院勤務でした。Uターンして検診業務に就くには抵抗がありましたが、先輩技師から、健康な人から病気を見つける仕事だから毎回同じ写真撮影でも『今日は○○部位に着目して仕事をしている』と教わり、日々研鑽して継続していくうちに検診の一つである胃がん検診の仕事が益々好きになってきました。

離島の悪条件である技師不足・メンテナンスの遅延等のハード面や、女性ゆえに家事・子育て、更に自分の病気（網膜剥離で失明寸前、更年期障害）で幾度か退職の危機に直面。これらの両面にもそのつど克服して継続したことにより全国で35名という名誉ある賞をいただけてこの仕事を選んでよかったと技師冥利に尽きます。

同窓会の皆様！ 一度の人生！興味を抱いたことに突き進んで欲しいし、前途ある若者には興味ある事柄を見つけるため勉学に励んで欲しいと願っています。

以前会社の研修会で「今まで生きてきた中で、自分の人生はそこそこと思う人？」と言う講師の問いに挙手した人は100人中2～3人でしたが、「今手を上げた人はめでたい人です!!」「ちなみに、午前中の研修で手をあげた人は、○○さん一人でした。」と言われ、納得したことがあります。○○さんは、私の2年後輩の佐渡高校の卒業生です。

私も彼女も仕事に対する取り組み方や人生に対する考え方が似ていることだと思います。自分の目的に向って進む努力をしているから挙手できたのです。一度の人生悔いのないようもう少し現役で、今まで学んだ知識やノウハウを伝えて生きたいと思います。

同窓会の皆様！ 老いも和きも佐渡のために貢献していきましょう。

第56回関西支部総会

令和四年十月二十二日（土）に関西支部 第五十六回総会が新大阪駅近くのホテルメルパルク大阪のレストラン カトレアで開催されました。七月の幹事会で歴史ある関西支部総会を「コロナなんかに負けてたまるか」との想いで開催を決定した次第です。コロナ感染が心配される中で座席の間隔とパーテーションを設置して、部屋の換気、入場時の検温、アルコール消毒、マスク着用等をお願いして、感染防止に万全を期して開催致しました。

来賓として同窓会本部から遠方のところ鈴木同窓会長始め、長年交流している中部支部北帰会の斉藤支部長のお二方を、お迎えして有意義な総会が開催出来ました。コロナ感染の心配や体調の都合で最終的に十七名参加の総会となりました。須藤支部長から遠方からの来賓参加に対する謝意と高齢化に対する活性化等の挨拶の後、鈴木同窓会会長から八月の総会で中山会長が退任し、鈴木新会長の就任挨拶。又、学校案内の資料で佐渡高校の概要と部活動の状況、生徒の文武両道の活躍をご説明頂きました。中部支部の斉藤支部長からは北帰会も高齢化が進み出席者減少ため「北帰会たより」等を発行して活性化を図ると共に、今後も関西支部と協調していきたいとの話がありました。

総会では関西支部の決算報告や活動報告、前年欠席者もおり関西支部規約と役員の一部変更等の説明を行い満場一致で承認されました。

第二部の懇親会では、須藤会長から関西支部の高齢化が進む中で、新規参加者等の底上げを図ると共に春の見学会の充実を図って行きたいと挨拶して、同窓会の発展とご健勝を祈念して乾杯の発声で宴席開始。一息入れたところで出席者全員が自己紹介や近況報告等で情報交換し、皆さんじょう舌な話で和やかに親睦を図った。鈴木同窓会長が自らテーブルを廻って一人一人と気さくに対話され皆さん感激されておりました。又、余興のカラオケタイムはコロナの心配があり、使用出来ないため、民謡団を呼んで各地の民謡を披露していただき、佐渡の「相川音頭」「両津甚句」を幹事二人が唄い「佐渡おけさ」を皆で唄い踊って、久しぶりに懐かしい故郷の気分を味わいました。

最後は同窓会の発展と会員皆様のご健勝とご多幸を祈念して「一本絞め」で閉会とした。

須藤支部長

関西在住の同窓生の皆様、春の花見を兼ねて、令和五年四月一日（第一土曜日）に三重県の伊賀上野城の見学会を計画しております。又、秋は令和五年十月二十八日（第四土曜日）に関西支部第五十七回の総会及び懇親会を開催致します。より多くの会員のご出席をお待ちしております。

関西支部幹事長
板倉健（昭和37年卒）記

「伊賀上野城見学会」の開催

令和五年四月一日（土）に「伊賀上野城見学会」を企画したところ、遠方の中部支部から六名のご参加を頂き、家族ずれ含めて総勢十七名の参加となりました。今回も中型観光バスをチャートして移動しましたが、車中では須藤支部長のご参加頂いた皆様への謝意の挨拶の後、今回の見学会の見どころについてご案内を頂きました。最初の見学地は日本三大仇討の一つ「荒木又右エ門鍵屋の辻仇討の場」を語り部の案内で見学の後、時間の都合で先に昼食にし、須藤支部長の挨拶「ご夫妻三組、初参加三人等参加御礼、佐渡金山の世界遺産登録見込み等」に続いて中部支部石塚新支部長の乾杯発声で昼食会が始まり、他支部との交流を図るため皆様から自己紹介や近況、同窓会への想い等で意見交換し融和が図れ、各自じょう舌にスピーチを行い和やかに親睦を深めました。午後から松尾芭蕉記念館～伊賀流忍者博物館～伊賀上野城等を語り部の案内で廻り、満開の桜を見ながら歴史と文化を知ることが出来ました。

関西在住の同窓生の皆さん是非関西支部総会にご出席下さい。今年は十月二十八日（土）に開催予定です。お待ち申し上げます。

関西支部幹事長
板倉健（昭和37年卒）記

先輩に追いつけ！追い越せ！在校生の活躍

令和四年度（全国大会・北信越大会出場クラブ）

本校からは、陸上競技部、バドミントン（男子）バスケットボール（男子）が北信越大会に出場しました。

相川分校からは、バスケットボール部（男子）が全国大会で準優勝しました。

佐渡高校では、多くの生徒が部活動に所属し、日々の練習や活動に積極的に取り組んでいます。引き続きご支援のほど、よろしくお願いいたします。

※印は　北信越大会
◎印は　全国大会

運動部

《本　校》

◆陸上競技部

・北信越高等学校陸上競技対抗選手権大会

＝男　子＝

【８００ｍ】
準決勝進出　渡邉隼人　※
予選出場　髙野隼輔　※

【１５００ｍ】
11位　渡邉　隼人　※

【やり投げ】
10位　藤原　靖大　※
14位　渡邉　氣円　※

・北信越高等学校新人陸上競技大会

＝男　子＝

【やり投げ】
２位　藤原　靖大　※
７位　渡邉　氣円　※

◆バドミントン部（男子）

・北信越総合体育大会　※
１回戦　０－３　勝山（福井）

◆バスケットボール部（男子）

・北信越高等学校新人バスケットボール選手権大会

ベスト８　※
１回戦　75－68　福井商業
２回戦　51－77　北陸学院

《相川分校》

◆バスケットボール部（男子）

・全国高等学校定時制通信制体育大会　準優勝
２回戦　61－43　博多青松（福岡）
３回戦　95－59　雄峰（富山）
準々決　98－62　尼崎市立琴ノ浦（兵庫）
準決勝　84－72　天理（奈良県）
決　勝　74－80　八王子拓真（東京）

相川分校バスケットボール部（男子）

文化部

《本　校》

◆新聞部

◎第37回新潟県高等学校総合文化祭新聞部門
・第27回新潟県高等学校新聞コンクール　優秀賞
（令和５年度全国総文２０２３出場）

◆書道部

◎第23回高校生国際美術展
書の部
秀作賞　鈴木　貴与
奨励賞　本間帆乃佳
〃　末武　佑理

2023年3月卒業生の主な合格先

大阪大学、東北大学、筑波大学（2名）、岩手大学、秋田大学（2名）、山形大学、茨城大学、室蘭工業大学、新潟大学（15名）、上越教育大学、長野大学、はこだて未来大学、岩手県立大学、秋田県立大学、石川県立大学、埼玉県立大学、新潟県立大学、新潟県立看護大学、三条市立大学、都留文科大学、山梨県立大学、明治大学、中央大学、立教大学、法政大学（2名）、同志社大学、立命館大学、順天堂大学など。

例年と同様、大学・短大進学者は、卒業生全体の7割を越えました。令和5年3月卒業生の進学率は71・2％となりました。佐渡高校では、上級学校の受験で必要となる学力の育成に、日々取り組んでいます。また、生徒一人一人が進路希望を実現できるよう、丁寧で的確な指導を続けています。引き続きご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

過去５年間の卒業生の進路先

	2023	2022	2021	2020	2019
国公立大学	38	36	51	40	45
私立大学	65	84	61	72	82
国公立短大	2	1	1	2	2
私立短大	4	4	9	7	4
専門学校	31	34	46	38	40
就職	9	5	4	5	5
その他	4	8	7	3	9
卒業人数	172	172	179	167	187

文化講演会

「未来に向かって～今からできる事～」と題して、同窓生であるNANASE株式会社代表の石田七瀬様（平成11年卒）の文化講演会が開催されました。

数々の苦難を経て町工場をつなぐ架け橋になりたいと、埼玉県川口市にコンサルティングの会社を創業し、また大学のキャリアカウンセラーとして就活支援を担当し、7人のお子さんを持つワーキングマザーとしても様々なキャリアを築かれ多方面で活躍されています。

「人生には無駄な経験はない」そして「キャリア（人生）は他者が作るものではなく自ら切り開くもの」まさに、石田様の生き方から多くのことを学ぶ貴重な講演になりました。ありがとうございました。

【お詫び】

昭和28年に発刊した「同窓のおとずれ」に次のような間違いがありました。

昭和42年卒（２０６Ｐ）土屋猛様は、編集部の手違いで逝去となっておりますが、現在新潟市でお元気でご活躍されております。

訂正し心よりお詫び申し上げます。

【お願い】

同窓会事務局へのご連絡は、事務局職員の居る左記の時間にお願いします。

毎週月曜日・木曜日
９時～12時

電話番号
０２５９-５７-３４１６（直通）
ＦＡＸ
０２５９-５２-５２５３

メールアドレス
sadohs-dousou@sadosv.com

※住所変更・訃報のお知らせなど、ハガキ、ＦＡＸまたはメールでいただけますとありがたいです。

佐渡高等学校同窓会
公式LINE
（2023年スタート）

▼佐渡高校同窓会のホームページができました▼

ホームページアドレス　www.sadohs-dosokai.com

同窓会発行の書籍について

佐渡高校同窓会発行の書籍の在庫があり、下記の価格で頒布しています。(知り合いで歴史に興味のある方がいましたら、ご紹介下さい。)

▼問い合わせ・購入は同窓会本部事務局まで
(電話 0259-57-3416)

- ●同窓のおとずれ　送料込　5,000円
- ●佐渡高等学校百年史　送料込　3,000円
- ●近世先賢書簡集(萩野由之博士蒐集)　送料込　10,000円
- ●伊藤氏日記　送料込　5,000円

令和５年度 同窓会役員名簿

会長	鈴木啓介
副会長	永田治人
副会長	林　隆行
副会長	石見裕子
副会長	引野紀子
顧問	中山秀英
顧問	中川哲昌
顧問	弾正佼一
顧問	天池範夫
顧問(校長)	森川幸彦
監査	濱田毅
監査	中川恒男
監査	児玉功

二見支部長	坂本久和
沢根支部長	近江和芳
河原田支部長	林　隆行
二宮支部長	渡辺直樹
八幡支部長	金子邦朗
金沢支部長	畠山茂樹
金・吉井支部長	西田健司
両・吉井支部長	甲斐元也
新穂支部長	板垣　徹
畑野支部長	渡部義雄
真野支部長	山本充彦
羽茂支部長	小橋敞膺

相川支部長	竹田　裕
赤泊支部長	金田淳一
松ヶ崎支部長	計良武彦
岩首支部長	西　美和子
水津支部長	清田　惠
河崎支部長	大場憲栄
両津支部長	尾潟恒雄
加茂支部長	安福征矢
内海府支部長	木村和彦
両・外海府支部長	
相・外海府支部長	地多正光
高千支部長	山本雅明
金泉支部長	今井茂樹

小木支部長	深野俊之

評議員	摩尼義晴
評議員	本間栄三郎
評議員	山本ミチ子
評議員	浅島　誠
評議員	須藤健一
評議員	関川敬義
評議員	和泉　徹
評議員	立壁邦子
評議員	古賀洋子
評議員	北見千香子
評議員	山下英子
評議員	中山道夫
評議員	金森大蔵

評議員	大崎直樹
評議員	加藤恭子
評議員	川上　治
評議員	斎藤英夫
評議員	吉田秀樹
評議員	村田慶朗
評議員	渡部　尚
評議員	加藤　健
評議員	関根敬子
評議員	岩崎隆寿

寄贈図書抄

令和４.７月～令和5.７月

著　著　名	著　者　名	寄　贈　者	年月
季刊　朱鷺　第53・54・55・56・57号	朱鷺俳句会 赤塚 五行	赤塚 守(昭和44年卒)	令4.7～
ロードムービーの想像力　旅と映画、魂の再生	ニール・アーチャー著 土屋 武久 訳	土屋 武久(昭和54年卒)	令5.3
柏倉一徳　森 知幾と北 一輝そして世界の未来	森　幾	森　幾(昭和33年卒)	令5.6
百六歳　命の魂	田中 志津	田中 志津	令5.7

訃報

令和４年８月から令和５年７月20日までに事務局に連絡のあった方々です。生前のご厚誼を深謝し謹んでご冥福をお祈りいたします。

区分	氏名	出身	年月
昭和31佐高	坂下英世	二見	令和元年11月
昭和24高併中	久保雅一	両津	令和2年5月
昭和13河高女	宇佐美(尾方)聡子	河崎	令和2年5月
昭和16河高女	小池(遠藤)富里	真野	令和2年6月
昭和20佐中	鶴見光司	両津	令和2年9月
昭和18河高女	仁科(石塚)愛子	赤泊	令和2年10月
昭和24高併中	黒川正治	二宮	令和2年11月
昭和31佐定	川野名敏彦	真野	令和3年2月
昭和14河高女	磯西(羽生)美千代	真野	令和3年2月
昭和20佐中	三浦淑哲	相川	令和3年3月
昭和24旧高	山本軍次	相川	令和3年3月
昭和33佐高	白井俊明	八幡	令和3年3月
昭和27佐定	末武康雄	沢根	令和3年4月
旧職員	赤塚　二二夫	金井	令和3年4月
昭和26佐高	秋田　実	沢根	令和3年5月
昭和16佐中	木村一義	内海府	令和3年6月
昭和21河高女	清水京子	両津	令和3年8月
昭和20佐中	瀬下宗一郎	河原田	令和3年8月
昭和27佐高	室岡文夫	吉井	令和3年8月
昭和30佐高	山本(寺尾)ヤツ子	二宮	令和3年8月
昭和36佐高	三国武彦	畑野	令和3年8月
昭和18佐中	羽藤金治郎	赤泊	令和3年9月
昭和37佐高	土屋則子	高千	令和3年9月
昭和20河高女	本間敏子	二宮	令和3年10月
昭和23河高女	岡田(高柳)かほる	真野	令和3年10月
昭和27佐高	木村(青野)歌子	沢根	令和3年10月
昭和32佐高	本田　厚	河崎	令和3年10月
昭和21河高女	杉山(富田)八重子		令和3年10月
昭和43佐高	臼杵嘉一	金沢	令和3年11月

区分	氏名	出身	年月
昭和43佐高	本間(笠井)とみ	真野	令和3年11月
昭和32佐高	中川勝夫	畑野	令和3年11月
昭和36佐高	加藤　亘	沢根	令和3年11月
昭和26佐高	吉野(竹本)幸子	河原田	令和3年11月
昭和27佐高	鶴間天然(聡)	真野	令和3年11月
昭和26佐高	斎藤　隆	相川	令和3年11月
昭和18河高女	山田(佐々木)ユリ子	二宮	令和3年12月
昭和21佐中	山本　信	真野	令和3年12月
昭和33佐高	長野　開二	真野	令和3年12月
昭和18河高女	有田(吉沢)京子	小木	令和3年12月
昭和31佐高	中盾(寺島)三雄	松ヶ崎	令和3年12月
昭和33佐高	池田幸重	高千	令和4年1月
昭和32佐高	酒井忠之	新穂	令和4年1月
昭和25旧高	斎藤裕明	金沢	令和4年2月
昭和41佐高	生田正夫	畑野	令和4年2月
昭和33佐高	名畑(杉本)尚子	河原田	令和4年2月
昭和34佐高	渡部幹雄	二宮	令和4年2月
昭和18河高女	石塚久枝	河原田	令和4年3月
昭和25河高女	笠原(金子)睦美	水津	令和4年3月
昭和20佐中	市川基世	東京	令和4年3月
昭和32佐高	稲葉八郎	外海府	令和4年3月
昭和25旧高	斎藤哲三	両津	令和4年3月
昭和34佐高	山本(石橋)ヨシ	高千	令和4年3月
昭和34佐高	飯沼(逸見)恵子	真野	令和4年4月
旧職員	長谷川周壽		令和4年4月
昭和19河高女	仲野(石塚)トミ	赤泊	令和4年4月
昭和43佐高	北澤一房	両津	令和4年4月
昭和21河高女	斎藤(田辺)ヨシ子	新穂	令和4年5月
昭和47佐高	本間久美子	金沢	令和4年5月

区分	氏名	出身	年月
昭和27佐高	宮田　宏	真野	令和4年5月
昭和11河高女	伊里(加藤)久	沢根	令和4年5月
昭和35佐高	本間克己	河原田	令和4年5月
昭和28中央高	脇野春子	吉井	令和4年6月
昭和22河高女	北原(鈴木)俊子	畑野	令和4年6月
昭和48佐高	宮尾(信田)朋子	相川	令和4年6月
昭和21佐中	本間　久	河原田	令和4年6月
旧職員	浜口福寿		令和4年6月
昭和46佐高	椎野(矢田)典子	真野	令和4年6月
昭和31佐高	高橋荘二	河原田	令和4年7月
昭和34佐定	高橋(本間)信栄	沢根	令和4年7月
昭和26佐高	金子(佐野)恵美子	河原田	令和4年7月
昭和36佐高	市野雅啓	河原田	令和4年7月
昭和14河高女	山下朝野	沢根	令和4年7月
昭和35佐高	臼木　浩	真野	令和4年8月
昭和45佐高	渡部　惠	二宮	令和4年8月
昭和27佐高	霍間寿雄	新穂	令和4年8月
昭和30佐高	伊藤(菊池)春光	新穂	令和4年8月
昭和28佐高	渡辺永二	松ヶ崎	令和4年8月
昭和24河高女	中村(宇佐見)ユキ	沢根	令和4年9月
昭和28佐高	寺島棟夫	松ヶ崎	令和4年9月
昭和27佐高	桃井(高田)冨二夫	東京	令和4年10月
昭和24高併中	坂野孫一	両津	令和4年10月
昭和52佐高	中川宏之	赤泊	令和4年12月
昭和25旧高	姥澤角雄	金沢	令和4年12月
旧職員	和田清一	羽茂	令和4年12月
昭和28佐高	本間久喜	畑野	令和4年12月
昭和30佐高	坂口正徳	二見	令和5年1月
昭和21河高女	菊地(岡崎)誠子	羽茂	令和5年1月

区分	氏名	出身	年月
昭和26佐高	岡崎(村岡)敬子	八幡	令和5年1月
昭和35佐高	丸山(小田)キヌ子	真野	令和5年1月
昭和46佐高	石見豊明	金泉	令和5年1月
昭和32佐高	山本修巳	真野	令和5年2月
昭和48佐高	小浜安夫	羽茂	令和5年2月
昭和28佐高	本多義美	河原田	令和5年2月
昭和28佐高	末武芳一	沢根	令和5年3月
昭和24旧高	佐藤利夫	新穂	令和5年4月
昭和43佐高	若林万里子	両津	令和5年4月
昭和20佐高	茨城　弘	佐和田	令和5年5月
昭和28佐高	野尻義明	河原田	令和5年5月
昭和36佐高	中島貞夫	加茂	令和5年6月
昭和31佐高	矢田(丸山)政子	河原田	令和5年6月
昭和29佐高	小林　隆	相川	令和5年6月
昭和38佐高	池田雄彦	吉井	令和5年7月
昭和46佐高	後藤敏数	畑野	令和5年7月

編集後記

◆同窓会会員の皆さまにおかれましては、日頃より同窓会の活動にご支援とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。皆さまのご協力のおかげで、今年度も『同窓会報』を発行することができました。ありがとうございます。会報を通じて、同窓会活動が活性化し、同窓生各位の絆がさらに強くなることを願っております。

◆同窓会の維持会費につきましても、多くの会員の方に納めていただき感謝しております。引き続き会費の納入をお願いします。今回の『同窓会報』にも、会費を納めていただいた方のご芳名をあげさせていただきました。

◆令和五年度は、鈴木会長のもと同窓会総会及び懇親会も実施します。ぜひご参加ください。

◆令和五年度より同窓会業務を担当する保健体育科教員の石川万寿美です。可能性を秘めた生徒たちが集う母校である佐渡高校に勤務できることを幸せに思っております。同窓会の業務にも、スピード感をもって丁寧に取り組んでまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

※会報の原稿をお送りいただく場合は、六月末日までにお願いいたします。

(同窓会事務局　石川万寿美、渡辺日出子、本間睦子)